

学内広報

for communication across today



特集：■世界の海洋生物学の研究拠点へ
ーマリン・フロンティア・サイエンス・プロジェクト開始ー

2012.8.27

No. 1428

世界の海洋生物学の研究拠点へ —マリン・フロンティア・サイエンス・プロジェクト開始—



世界一生物相の豊かな相模湾に臨む理学系研究科附属臨海実験所(略称:東京大学三崎臨海実験所)。この実験所を海洋生物学の世界的な研究拠点にするべく、現在、東京大学基金による支援プロジェクト『マリン・フロンティア・サイエンス・プロジェクト』が始まっています。この特集では、三崎臨海実験所の魅力とその支援プランについてご紹介しましょう。

三崎臨海実験所全景 (<http://www.mmbs.s.u-tokyo.ac.jp/>)

①三崎臨海実験所とは

世界一生物種が多いエリアに作られた研究施設

三崎臨海実験所は、1886年(明治19年)に現在の三崎の町(神奈川県三浦市)にわが国最初の、世界でも最も歴史の古い臨海実験所の一つとして設立された。

1897年(明治30年)より、生物相の豊かな油壺に移転し、2012年で創立126周年を迎えた。設立以来、多数の国内外の研究者・学生に利用され、その数は年間延べ3万人にもなる。わが国における生物学の発展に大いに貢献しており、世界的にもウッズホール海洋生物学研究所(米)・ナポリ臨海実験所(伊)・プリマス臨海実験所(英)と共に海産動物研究の歴史に大きな足跡を残している。

三崎が研究に最適な理由

三崎周辺は世界一豊かな生物相を持っている。この一帯は、相模湾の深海生物と黒潮の潮流に乗った生物が多く生息しており、そこへ東京湾からプランクトンを豊富に含んだ海水が流れ込むという環境にある。そのため、海の生物にとって非常に生息しやすいエリアとなっている。東大の初代動物学教授として就任していたE.モースも、この豊富な生物相に着目し、本学に臨海実験所を設立するよう進言した。



調査船「臨海丸」



明治からの歴史

1877(明10)	東京大学理学部動物学教室創立 E.モース、来日 大森貝塚を発見する(6月) 江の島に漁師小屋を借り、臨海実験所を設立(7月-8月) 日本政府に恒久的臨海実験所の建設を勧告
1879(明12)	モース、東大教授の任満ち一時帰国
1881(明14)	デーデルライン、三崎を訪れて生物の豊かさに気付く
1882(明15)	箕作佳吉動物学教授、石川千代松を連れて三崎で実習
1884(明17)	箕作、三崎に実験所建設の方針を立てる
1885(明18)	三崎町入船の海関(船番所)跡地を入手
1886(明19)	12月13日 実験所落成
1887(明20)	4月1日「帝国大学臨海実験所」として正式発足
1888(明21)	ウッズホール、プリマス両臨海実験所開設
1897(明30)	実験所、小網代の現在地(油壺)に移転



移転当時の研究所



1901年露・独・米からの研究者を招いて

② どういう研究が行われているのか

ウニを使った生物共通機構の発見

ウニは棘皮(きょくひ)動物門に属し、みかけは違いますが、ヒトと進化的に近い生き物です。ウニで発見したことを、ヒトの骨髄細胞の遺伝子治療などに応用しています。



赤坂甲治 教授

銅育水槽とウニ

ウミシダの強い再生能力を活用： 再生機構の解明

ウミシダは、失った「腕」を再生する能力が強く、数ヶ月で元通りにしてしまいます。この再生細胞を解析することで、ヒトの再生医療(失った部位の再生)に応用できないか、といった研究を行っています。



近藤真理子 准教授



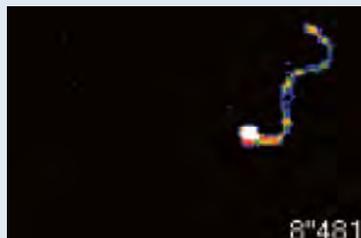
再生能力の強いウミシダ

ホヤを使った標的細胞の位置の認識 進行方向調節の分子メカニズム

ゲノム解析の進んだホヤ(カタユウレイボヤ)を使った精子と卵子の誘引物質の機能解析を行っています。将来的には不妊治療などへの応用が期待される分野です。



吉田学 准教授



カルシウムによる精子の進行方向調整

ゲノムがコンパクトなフグを活用： 頭部構造の進化の研究

ゲノム構造が比較的コンパクトなフグを用い、頭部の神経系統の発達を研究しています。身体がどのように形態を形成していくのかを研究することで、広く医療や生化学の分野での応用を目指しています。



黒川大輔 助教



魚からヒトまで共通する頭部形成の分子機構

最も原始的な多細胞動物：カイメンから動物の進化機構を探る



伊勢優史
特任助教

カイメンを使って、従来の生物分類を遺伝子の観点からもう一度見直す、という研究を行っています。形態学・遺伝子科学の複合領域であり、生物の分類という基礎を最新の科学で解き明かしていきます。



多細胞動物の進化の原点:カイメン

ナメクジウオを使った脊椎動物の起源に関する研究

ヒトを含む脊椎動物の共通の祖先とされているナメクジウオの研究によって、進化の過程を解析しています。



窪川かおる
特任教授



ナメクジウオ

④みんなで三崎臨海実験所の活動を応援しましょう！！

Q どうしてプロジェクトを立ち上げたの？

ノーベル賞受賞者を多く輩出しているウッズホール海洋生物学研究所は、民間からの支援を積極的に取り入れています。日本においても、教育・研究機関を社会が支えるという仕組みを確立し、大いなる研究成果を世界に発信していきたいと思っています。

Q どうやってお金を集めているの？

- ① 渉外本部と協力し、東大基金寄附者等への渉外活動及びDM等を通じて寄附を呼びかけています。
- ② 提携を結んだ三浦市や、神奈川県に協力をいただき、寄附を呼びかけています。
- ③ 理学系研究科内でも呼びかけています。



実験所に

☆銘板を作ります☆

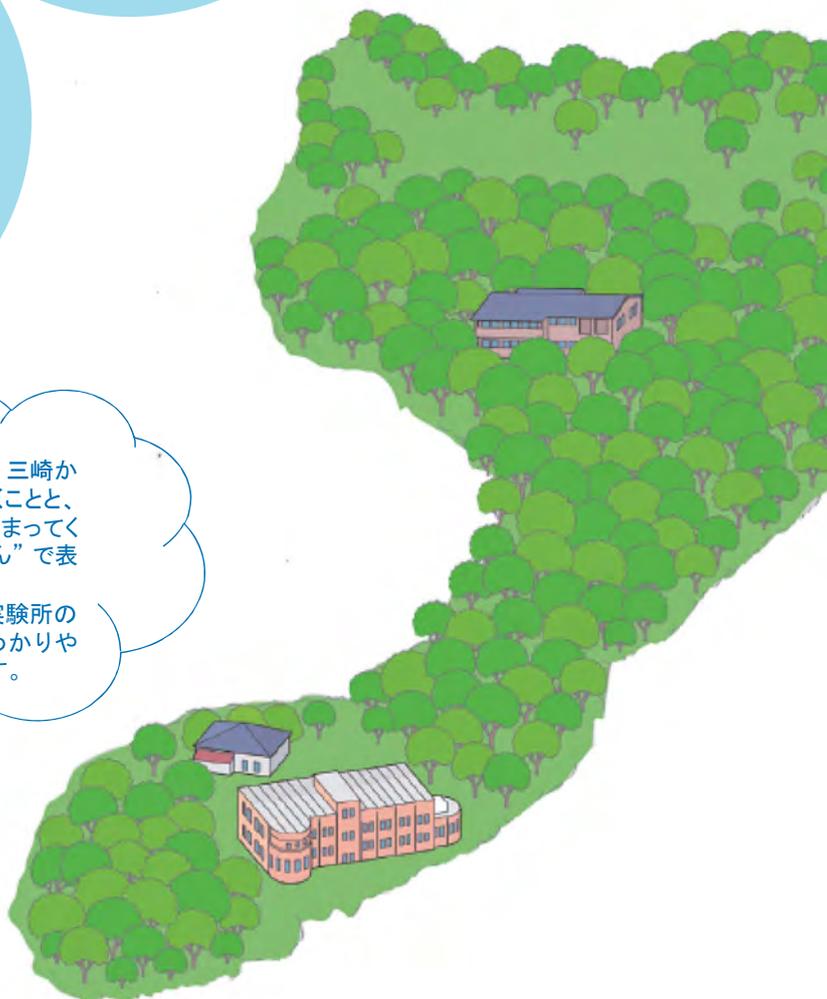
10万円以上のご寄附をいただいた方は、三崎臨海実験所の銘板にお名前を記して末永く掲示いたします。

Q どうやって支援すればいいの？

- ① 三崎臨海実験所、理学系研究科、渉外本部、油壺マリンパークや三浦市等で配布しているパンフレットから。
- ② 東京大学基金ホームページから。
<http://utf.u-tokyo.ac.jp/>
- ③ 東京大学基金へ振込用紙を請求（東京大学基金事務局：内線21217）。

【左下】プロジェクトのロゴは、三崎から様々な成果が広がっていくことと、三崎に様々な人や情報が集まってくることの2つを“水泡のらせん”で表しています。

【右】イメージイラストは、当実験所のある特徴的な三崎の地をわかりやすくビジュアル化したものです。



渉外本部では、この他にも募金活動を支援しています。東日本大震災救援復興支援プロジェクト、Life in Greenプロジェクト、Go Global奨学基金、スポーツ振興基金など、東大基金支援プロジェクトとして、続々と立ち上げています。

【詳しくはこちらまで】

Email: kikin@adm.u-tokyo.ac.jp、渉外本部 下田(内線:20496)、松本(内線:20541)

NEWS

第9回江崎玲於奈賞受賞

片岡一則 大学院工学系研究科・工学部 教授



大学院工学系研究科片岡一則教授(医学系研究科教授 兼務)が、財団法人茨城県科学技術振興財団(理事長:江崎玲於奈)より、第9回江崎玲於奈賞を授与されることが決定しました。

同賞は、ナノテクノロジー分野において世界的に評価を受ける顕著な研究業績を挙げた者に授与されるもので、授賞式は10月につくば市にて開催されます。

受賞の対象となった研究主題は、「高分子ナノ構造を用いた薬物・遺伝子キャリアの開拓と難治疾患標的治療への展開」です。

片岡教授は長年の研究により、精密に設計された一連の機能高分子を合成、自己集積させることにより、ウイルスに近いサイズ(数十ナノメートル)の球殻状(高分子ミセル)の薬物運搬体(キャリア)を創り、制がん剤を内包させることによって、難治固形がんの標的治療に有効であることを実証しました。この成果として、現在4種類の異なる制がん剤を内包した高分子ミセルが、国際的な臨床試験にまで進んでおり、膵臓がんをはじめとする難治がんの薬物治療にブレークスルーをもたらすものと期待されています。さらに、このような高分子キャリアが、遺伝子や核酸医薬デリバリーにも有用であることを実証するなど、有機化学におけるナノテクノロジーを活かして、薬学や医療の新領域を開拓しました。

一般ニュース



地球観測データ統融合連携研究機構



「国連持続可能な開発会議(Rio + 20)」にて展示・パネルディスカッションを開催

6月13日(水)～6月24日(日)に、ブラジル・リオデジャネイロで開催された「国連持続可能な開発会議(Rio + 20)」のジャパンパビリオンにおいて、MEXT/GEO(文部科学省/地球観測に関する政府間会合)のブース展示ならびに政策に関するパネルディスカッションを行った。

「国連持続可能な開発会議(Rio + 20)」とは1992年にブラジルのリオデジャネイロで開催された「国連環境開発会議(地球サミット)」から20年、2002年に南アフリカのヨハネスブルクで開催された「持続可能な開発に関する世界首脳会議(ヨハネスブルグ・サミット: Rio+10)」から10年を迎え、国連会議として各国の最高のレベルのリーダーが参加し、持続可能な発展、過去の主要サミットの成果の進捗、新たな課題への対応などを話し合うものである(参照 <http://www.uncsd2012.org/> 英語)。

2002年のヨハネスブルグ・サミット(Rio+10)では地球観測の重要性が強調され、2005年の第3回地球環境サミットで、「地球観測に関する政府間会合(GEO)」が設立された。同時に、本学地球観測データ統融合連携研究機構の小池俊雄教授ら共同議長国の専門家4名が中心となって起草した「国際的な連携によって、衛星、地上、海洋現場観測等の地球観測データや情報システムを統合し、地球全体を対象とした包括的かつ持続的な全球地球観測システム(GEOSS)の10年実施計画」が合意された。今回、この上記の実施計画に基づいて開発されたシステムの紹介や日本におけるGEOSSの活動紹介を目的として、地球観測データ統融合連携研究機構が主導し、文部科学省(MEXT)と国内の地球観測に関する政府間会合(GEO)に関わる関係機関が協同し「MEXT/GEO」のブース展示を、日本パビリオンにおいて実施した。



日本パビリオン概観（左上）と内部（右上）、
MEXT/GEO ブースの様子（左下、右下）

「MEXT/GEO」ブースでは、国内から、産業技術総合研究所、海洋研究開発機構、国立環境研究所、宇宙航空研究開発機構、森林総合研究所、国土地理院、環境省、文部科学省、東京大学、国外からは、地球観測に関する政府間会合（GEO）事務局、地球観測衛星委員会（CEOS）事務局が協力し、各機関の活動を示すポスター展示、また、デモンストレーションDVDを用いたビデオプレゼンテーション、ショートレクチャ（6月17日（日）～22日（金）の毎日計15回）を実施した。

6月19日（火）には、日本パビリオンのイベントホールにおいて、小池教授の企画の下、政策に関するパネルディスカッション「High-level Thematic Debate-An integrated approach to Human Security, the Environment and the Economy」が実施された。加藤重治文部科学省国際統括官の開会挨拶、Jose Achache GEO 事務局長による GEOSS の overview の後、Kerri-Ann Jones 米国国務省次官補、Dan McDougall カナダ環境省次官補、Manuela Soares 欧州共同体（EC）研究開発局長から各国の声明が紹介された。その後、大竹暁文部科学省審議官、Antonio Diion Moura 世界気象機関（WMO）統括責任者、本間正修宇宙航空研究開発機構（JAXA）理事、Stephen Briggs 欧州宇宙機関（ESA）地球観測局長をパネラーに加え、Barbara J. Ryan 世界気象機関（WMO）宇宙計画局長の司会の下、「地球観測の2015年以降の方向性を含め、人類の安全保障、環境及び経済に GEOSS がどう貢献できるか」と題してパネルディスカッションを行った。最後に、堀江正彦外務省地球環境問題担当大使と A. D. Moura 氏のリードにより、本イベントの成果報告が合意された。



ショートレクチャの様子（左）と
High-level Thematic Debate の様子（右）

これらの成果が実り、Rio+20 の成果文書のパラグラフ 274 に GEOSS という固有名詞を用いて地球観測の重要性が記載され、持続可能な開発における地球観測の役割が明確に位置づけられた。

本件に関するお問い合わせは、地球観測データ統融合連携研究機構事務局 電話 03-5841-6132（Ex 26132）または、E-mail: editoria@editoria.u-tokyo.ac.jp までお願いします。



一般

本部学生支援課

第51回全国七大学総合体育大会開
会式開催される

7月7日（土）九州大学総合体育館において、第51回全国七大学総合体育大会開会式が開催され、濱田純一総長（大会副会長）および武藤芳照理事・副学長（大会参与）が出席した。

本大会は旧帝国大学である七大学により開催される総合体育大会であり、運営は学生によって行われている。開会式では、本年度の主管校である九州大学の有川節夫総長（大会会長）の挨拶や九州大学応援団による演舞が行われた。

開会式後は九州大学学生食堂「ビッグさんど」においてレセプションが行われ、各大学が大会への抱負を語った。本学は武藤理事から「果敢なる闘士であればあるほど、潔い敗者であれ」との力強いメッセージが述べられた。また、九州大学学生によるステージとして、「当仁太鼓」、「ジャグリング」も行われ、盛会のうちに終了した。



開会式で紹介される濱田総長



開会式で演舞する九州大学応援団



レセプションで挨拶する武藤理事

地球観測データ統融合連携研究機構

一般

第2回DIAS-GRENE環境情報統融合フォーラムーグリーンイノベーションを支えるデータ統融合ーが開催される

7月9日(月)、夏本番を思わせるような日差しの強い午後、本郷キャンパスにオープンしたばかりの真新しい伊藤国際学術研究センター・伊藤謝恩ホールにて、第2回DIAS-GRENE環境情報統融合フォーラムが開催された。DIAS-GRENE(ディアス-グリーン)とは、当機構が文部科学省研究開発局より委託を受け、平成23年度より実施している二つのプロジェクトの名称で、それぞれ、「環境情報統融合プログラム」(DIAS)および、「大学発グリーンイノベーション創出事業『グリーンネットワーク・オブ・エクセレンス』事業環境情報分野」(GRENE)の略称である。

副題に掲げられたグリーンイノベーションについては、昨今、その潮流は世界的なものとなりつつあるが、世界的な課題である地球環境問題に対して、社会の持続的な発展を目指して科学技術や社会的思考のさまざまな変革を基に展開する多様な取り組みを指し、具体的には、環境・資源・エネルギー分野の革新的な技術研究開発とその成果の実用化のためのシステム転換の一体的推進、新たな発想を活用することによるライフスタイルやビジネススタイル等の転換、地域における農林業の再生や街づくりを意味する。また一般にグリーンイノベーションは、低炭素社会、循環型社会、自然共生社会の構築にも通じるとされている。

当機構が推進する前述の二つのプロジェクトでは、エネルギー・水、食糧、健康、都市、生態系などの統合的な人間生活の中で安全保障を確立する、という喫緊の課題に対して新たなグリーンイノベーションを創出するために、地球環境と社会・経済活動をつなぐデータや情報を包括的に共有し、知識や経験を相互に交換し、合意の形成や協働の場をつくるための支援を実現に導くことのできる、データ基盤の構築を目指している。このたびのフォーラムにおいては、そのデータ基盤構築の意義と、構築へ向けた道筋について議論することになった。

開会の挨拶を、文部科学省大臣官房審議官(研究開発局担当)の大竹暁氏と、前田正史理事・副学長が務め、基調講演は、内閣府総合科学技術会議議員の相澤益男氏に、「グリーンイノベーションの展開戦略」と題してお話いただいた。当機構からは、機構長 喜連川優教授(生産技術研究所)および柴崎亮介教授(空間情報科学研究センター)が、データ統融合システムの開発について、これまでの研究成果の報告を行い、同時にGRENEプロジェクトにおいて「都市」分野の課題代表者である名古屋大学の林良嗣教授(環境学研究科)より、「環境技術を用いたレジリエントな国土のデザイン」と題して、データ統融合を用いた利用研究について紹介があった。



挨拶する前田理事・副学長（左）
基調講演をいただいた内閣府総合科学技術会議議員相澤氏（右）

フォーラム後半では、当機構の小池俊雄教授（工学系研究科）がモデレータとなり「グリーンイノベーションを支えるデータ統融合」と題したパネルディスカッションが行われた。特に、1. 地球観測予測統合解析システムの構築について、2. 社会に役立つ情報の提供、3. 新しい科学潮流「Big Data」と地球環境統融合について、パネリストのあいだで、活発な議論が交わされた。



パネルディスカッションセッションの様子

その後、ホールに隣接する多目的スペースにおいて、DIASとGRENEの両プロジェクトから、個別の研究課題の研究成果を示すポスターセッションが行われた。各研究課題の研究者らが一堂に会し、説明やデモを繰り広げ、一般の参加者らを交え議論を戦わせるなど、大盛況のうちに閉会した。当日の参加者総数は230名に上った。

本件に関するお問い合わせは、地球観測データ統融合連携研究機構 事務局 電話 03-5841-6132 (Ex 26132) または、E-mail: editoria@editoria.u-tokyo.ac.jp までお願いします。

本部環境安全課
「安全の日」講演会開催される
一般

7月10日（火）に本学「安全の日」講演会が、「安全リテラシー」をテーマとして、伊藤国際学術研究センター伊藤謝恩ホールにて開催され、学内外から約300人が参加した。

平成17年7月4日に大学院農学生命科学研究科リサーチフェローであった山下高広氏が、八丈島にて潜水作業中に亡くなられた事故を受け、本学ではこの日を「東京大学安全の日」と定めて、事故の記憶を風化させることなく、教育研究活動における安全衛生や安全意識の向上、事故災害の発生防止、及び安全文化の定着に取り組むことを改めて決意する日としている。

冒頭、濱田純一総長より、「近年、教職員や学生の皆さんの安全に対する意識は向上してきたと感じているが、過去に発生した事故と類似の事故の発生が後を絶たない。教員が責任をもって研究室の安全管理を徹底するとともに、本学の安全管理に関する活動が他大学の模範となるような安全管理体制を築いていきたい。安全文化の醸成には、一人ひとりの安全の素養を養うことが大学という場において重要である。本講演会が東京大学における安全意識の向上に役立つことを願う」との挨拶があった。



開会の挨拶をする濱田総長

講演の第1部では、明治大学の向殿政男教授より「安全リテラシーとリスクコミュニケーション」についての講演があった。絶対の安全は存在しないことを念頭に置いたうえで、正しい知識を得て、正しく怖がる必要がある。また、安全と安心の実現のためには、様々な立場の人々が協力してリスクコミュニケーションを行うことが重要であると話され、参加者も熱心に耳を傾けていた。

第2部では、「長岡技術科学大学におけるSDS（セイフティデータシート）の実践」について、長岡技術科学大学の福田隆文教授より講演があった。設備・作業毎に

適用される関係法令をリストアップし、横断的に管理する SDS の取り組みについて、実践的な実施手順を交えて紹介された。最後に、本学環境安全研究センターの刈間理介准教授より「米国の大学における安全衛生管理と安全教育」について、米国の大学での実地調査に基づいた研究・教育業務の安全衛生管理の実例などが紹介され、日本でも取り入れるべき安全管理の姿勢や手法について説明が行われた。

環境安全本部としては、今後も「安全の日」講演会を継続して開催することで、より良い学生生活と研究成果を得るうえで安全が全てに優先することを関係者全員で再確認する機会とし、リーディング大学にふさわしい安全文化の醸成に努めていきたい。



熱心に聴講する参加者

部局 ニュース

大学院総合文化研究科・教養学部

総合文化研究科職員の宮原洋子さんがモンゴル国よりナイラムダル（友好）勲章を受章

総合文化研究科職員の宮原洋子さんが、5月11日（金）、モンゴル国大統領令により「ナイラムダル（友好）勲章」を受章した。

在日モンゴル留学生支援や馬頭琴を広める活動をはじめとして、両国の友好親善に多大な尽力をされた功績を讃えての受章である。

本学においても、宮原さんは2011年2月に教養学部の主催で開催された「高校生のための金曜特別講座」において、モンゴルのレンツェンド・ジグジド大使を迎え、モンゴルの紹介をしていただいた際に、仕掛け人・交渉人の労を取ったり、また在日モンゴル留学生の支援も継続して行ったりするなど、本学とモンゴルの懸け橋とし

て多大な貢献を行った。



7月10日（火）、モンゴル駐日大使館で行われた授章式での駐日モンゴル国特命全権大使フレルバートル大使と宮原さん

海洋アライアンス

「防災海洋教育」シンポジウム等を
浜松と豊橋で開催

海洋アライアンス海洋教育促進研究センター（日本財団）（RCME）（事務局：理学系研究科）は、豊橋技術科学大学安全安心地域共創リサーチセンターと日本財団との共催で「防災海洋教育」の集会を、浜松市と豊橋市で各市の後援のもとで開催した。まず、6月2日（土）に浜松駅前えんてつホールで、講演会「津波防災の実践教育 - 東日本大震災に学ぶ -」を行った。後援の浜松市から土木部鈴木厚部長が挨拶され、「釜石の奇跡」（防災教育によりこのたびの大震災で津波から多くの命を救ったこと）で知られる片田敏孝教授（群馬大学）の講演と、続いて青木伸一教授（大阪大学）、川口達也研究員（東京大学）、井若和久氏（徳島大学大学院生）、丹羽淑博特任准教授（東京大学）によるパネルディスカッションが行われ、その後質疑応答が行われた。片田教授が語る3.11 東日本大震災以前から釜石で実践されていた津波防災教育とその効果に、200名を超える参加者は熱心に聞き入った。

次の7月8日（日）は、豊橋技術科学大学で、RCME 第5回シンポジウム「海洋教育と津波防災 - 東南海地震に備えて -」として開催され、地元を中心に約200名が参加した。海洋アライアンス副機構長浦辺徹郎教授の挨拶に続き、堺茂樹教授（岩手大学）、藤城信幸校長（田原市立和地小学校）、寺本潔教授（玉川大学）、青木伸一教授（大阪大学）、パネルディスカッションでは川口達也研究員（東京大学）を交え、長時間の質疑応答が行われた。山田聖志教授（豊橋技術科学大学）の閉会挨拶では大学と地域の協力の重要性などが話された。浜松市と豊橋市は遠州灘に面し、東海・東南海地震による大津波の発生が危惧されているため、参加者は、一般市民の他、小・中・高等学校の教員や自治体職員の方々も多く、アンケートには具体的な避難に関する質問や意見が多数あった。さらに海洋教育からの防災意識の啓発に対する

賛同意見も数多く寄せられた。

講演要旨はRCME ウェブサイトに公開している。
(<http://rcme.oa.u-tokyo.ac.jp/>)



片田敏孝先生の熱い話に聞き入る（6月2日、浜松市にて）



地震体操と津波体操が紹介された（7月8日、豊橋市にて）



活発な質疑応答の様子（7月8日、豊橋市にて）

大学院法学政治学研究科・法学部

「法学部3号館竣工記念式典、施設見学会、祝賀会」開催

大学院法学政治学研究科・法学部は、6月28日（木）、学内外関係者出席のもと、法学部3号館8階大会議室にて法学部3号館の竣工記念式典および山上会館にて祝賀会を開催した。

竣工記念式典では、山口厚研究科長の挨拶、濱田純一総長の挨拶に引き続き、文部科学省から清木孝悦文教施設企画部長のご祝辞を頂いた。その後、3号館の竣工に際しご寄附を頂いた、アンダーソン・毛利・友常法律事務所、TMI 総合法律事務所、長島・大野・常松法律事務所、西村あさひ法律事務所、森・濱田松本法律事務所、柳田国際法律事務所、東日本旅客鉄道株式会社、および山口弘子様（故山口俊夫名誉教授ご夫人）に対して、また、3号館の工事に尽力された各企業に対して感謝状を贈呈した。

式典終了後、会場を山上会館1階に移し、祝賀会を開催した。終始和やかな雰囲気にもまれて、19時過ぎに散会した。



山口厚法学政治学研究科長の挨拶



濱田純一総長の挨拶



清木孝悦文教施設企画部長のご祝辞

情報基盤センターでは、7月12日（木）、13日（金）に「学際大規模情報基盤共同利用・共同研究拠点 第4回シンポジウム」を、UDX GALLERY（秋葉原）で開催した。合計209名の参加者（大学125名、独法等研究機関24名、企業他60名）を迎えて盛会のうちに終わった。

「学際大規模情報基盤共同利用・共同研究拠点」（以下、当拠点）とは、北海道大学、東北大学、東京大学、東京工業大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学にそれぞれ附置するスーパーコンピュータを所有する8つの共同利用施設を構成拠点として、東京大学情報基盤センターがその中核拠点を担う「ネットワーク型」の共同利用・共同研究拠点である。毎年度、共同研究の公募・採択を行い、当拠点との共同研究を実施する。

今回のシンポジウムは、平成23年度に実施された公募型共同研究39課題の口頭発表による最終報告、および平成24年度公募型共同研究に採択された全35課題のポスター発表による研究内容紹介を実施した。口頭発表、ポスター発表ともに、一般の参加者も交えた活発な質疑や意見交換が行われた。

シンポジウム初日には、石川裕 総括拠点長（情報基盤センター長）による主催者挨拶と、下間康行 文部科学省研究振興局情報課長の来賓挨拶が行われた。それに続いて2日間にわたり、当拠点の研究分野である、超大規模数値計算系応用分野、超大規模データ処理系応用分野、超大容量ネットワーク技術分野、超大規模情報システム関連研究分野、およびこれらの分野にまたがる複合分野研究の研究内容発表および研究内容紹介が行われた。

閉会では、小林広明 課題審査委員長（東北大学サイバーサイエンスセンター長）からシンポジウム全体のサマリーを含めた挨拶があった。

当シンポジウムのプログラム、平成23年度採択課題の最終報告書、および、平成24年度採択課題の発表ポスターは次のURLから参照可能である。

当シンポジウムホームページ

<http://jhpcn-kyoten.itc.u-tokyo.ac.jp/sympo/>



挨拶する石川総括拠点長



挨拶する下間 文部科学省研究振興局情報課長



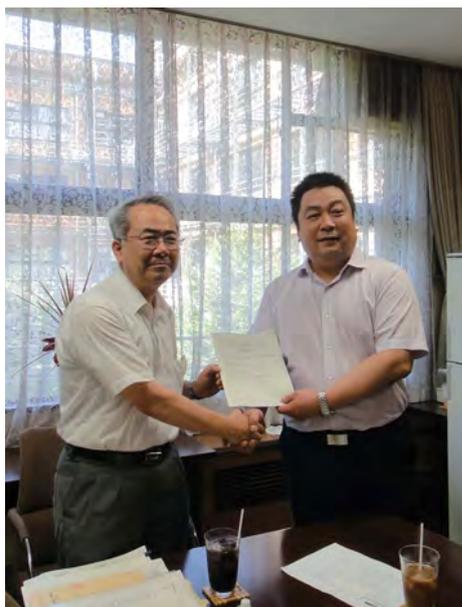
シンポジウムの様子

大学院農学生命科学研究科は中国食品発酵工業研究院と共同研究を開始することになり、7月17日（火）に蔡木易院長らが来日して長澤寛道研究科長を訪れ、契約書を取り交わした。



共同研究契約書にサインする蔡木易院長

農学生命科学研究科が中国の研究院と共同研究契約を結ぶのは今回が初めてである。蔡院長と長澤研究科長はこれを機に双方の関係を益々深めていきたいと語った。



握手を交わす蔡木易院長（右）と長澤寛道研究科長（左）

This month's

Todai Research

<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/todai-research/>

東大の研究紹介サイト「Todai Research」の情報をお知らせします。興味のある記事はありましたか？ぜひ、サイトをご覧ください！

Todai Research で検索

タグクラウドで記事を読む

機能のご紹介

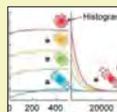
Todai Researchの記事には、研究の内容に関するキーワードがついています。サイト右側の「タグクラウド」から、そのキーワードを見ることができます。



ココです

実践！「記憶」をクリックしてみると...？

キーワードをクリックすると、そのキーワードでタグ付けされた記事を検索することができます。例えば「記憶」をクリックすると以下の記事が表示されます。面白そうですね？



2012/07/20 教育学研究科

忘却がもたらす驚くべき効果

軽微な忘却は運動指令を最適化することを理論的に証明



2012/05/17 医学系研究科

育つ環境が賢さに影響を及ぼす

刺激の多い環境下での記憶・学習能力の向上にKIF1Aが不可欠



2012/03/07 医学系研究科 薬学系研究科

脳回路の驚くべき精密さが判明

1ミクロンの精度で実現するクラスター入力

現在は、まだまだ記事数が少ない本サイトですが、今後、記事数が増えるにつれて、キーワードからもっともっと色々な研究の繋がりが見えるようになるはずですよ！「銀河」や「有機太陽電池」など、ぜひ興味のあるキーワードをクリックしてみてください。

ご意見・お問い合わせはこちらまで

Mail: kouhoukikaku@ml.adm.u-tokyo.ac.jp Ext: 21045

東大ポータル >> 便利帳 >> 総合企画部 >> 広報課

<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/todai-research/>

プロジェクトで復興を支援する 再生のアカデミズム 《実践編》 #06

東日本大震災、それに伴う原発事故という未曾有の大災害の発生以降、東京大学では様々な形で復興支援を行っています。また、総長メッセージ「生きる。ともに」に表されているように、先の長い復興に向けて、東大は被災地に寄り添って活動を行っていく覚悟でいます。この連載では、救援・復興支援室に登録されているプロジェクトの中から、復興に向けて持続的・精力的に展開している活動の様子を順次紹介していきます。

あまり知られていないかもしれませんが、青森県八戸市も東日本大震災にともなう津波により被災した地域の1つです。国指定天然記念物にもなっているウミネコ繁殖地である観光地域（蕪島地域）が壊滅的な被害を受けました。5~6年前から八戸市の中心市街地の活性化事業に関わっていた堀繁教授（アジア生物資源環境研究センター）は、市からの依頼を受け、観光地の復興に乗り出しています。

プロジェクト名： 八戸市活力創出まちづくり支援プロジェクト

広報課 八戸市の被災状況を教えてください。

堀 八戸は、津波被害の一番北端の場所です。幸い人的被害はありませんでしたが、一番被害を受けたのが、八戸の宝とも言うべき観光地である蕪島地域でした。蕪島には、毎年約3万羽のウミネコが営巣のために春早くから訪れます。間近でウミネコの営巣の様子を観察できる国内唯一の場所として、天然記念物にも指定されている地域です。その観光案内や飲食店など全部やられたのは、大きな打撃でした。

広報課 先生の研究テーマの1つに観光地の活性化というものがありますね。

堀 はい、これまでも国内のいくつかの観光地の活性化に向けた設計計画に携わってきました。ですので、蕪島地域の復興にもこれまでの実績を活かせると思います。

単に現状に戻す災害復旧の考えから、今はこれを契機に元より良いものにしよという復興という考えが常識になっています。体に例えようと、単にケガをしたところを治すだけでなく、それによって身体全体が元気にならないとダメということです。八戸市の復興も、被災した蕪島地域のみならず八戸市全体の復興も含めて考えています。具体的には次の2つの点が重要です。まず、自然保護をより徹底するという点。ウミネコは敏感な生き物で、環境が変わると営巣を止めてしまうということが分かっていますので、天然記念物であるウミネコを守るという観点から自然保護を徹底しなければいけません。もう一点は、ご多分にもれず八戸も他の地方の例と同様に疲弊している地域ですので、観光復興によって地域全体の活性化を目指すという点です。この点については具体的に、まずは観光客を増やすためのより魅力的な地域づくりを、ホスピタリティ（もてなし）ディベロップメントという考え方を中心に再構築し展開します。そして次に、来てもらった人にお金を落としてもらわなければ活性化しませんか

ら、そのしくみを考えます。商品開発をし、楽しい雰囲気やおしゃれなお店等を増やすということを考えています。売れるお店、施設、地域、という観点です。でも、これは漁業組合との関係からなかなか簡単にはいかなかったりもします。

こういったことを念頭に、20~30年先を見据えた計画を昨年市長へ提案しました（右：【復興構想図】）。市民への説明も経て、これから実行に移す段階にきています。

広報課 実行に移す時に難しいのは何でしょうか？

堀 絵に描いたものを形にするには、資金が必要です。どうやってお金をとってくるのかということを経営的に考えなければいけません。都市と地方の格差と言いますが、役所の人は言え、地方は情報が不足しています。環境省のこういうプロジェクトがあるとか、どうしたら資金調達できるかということまで専門家が関わらなければなりません。いろんな経費を組み合わせる効果的に実施できる方策と一緒に考えます。よく「地域住民の意識改革から始めよ」といった意見がありますが、私は意識が変わるのは最後だと思っています。専門家などが先導して実際に経済的にも潤ってからの、地域にとっては本当のスタートなのです。そこまでは私も市と一緒にやっています。

広報課 頻繁に八戸には行かれているのですか？

堀 月に2回くらいは行っています。こうしたプロジェクトは教育の側面も大きいので、学生達も一緒にやっています。センターから旅費が出たので助かりました。八戸とのつきあいは長いのでやりやすいのですが、漁業組合の方の、いわゆる漁師言葉というのはいまだに分らないですね（笑）。ウミネコの飛来数は震災後も変化なかったと聞いています。自然は強いと実感しますね。地球に生命が誕生してから何十億年という長い歴史の中で大きな災害は幾度もあ

ったわけで、あのような大震災でも生き物は大きく驚かないということなのでしょう。彼らにとって、自然災害よりもむしろ人為的なモノ・コトのほうが脅威となっているのではないのでしょうか。3万羽のウミネコの風景は壮観ですよ。この環境をそこなわず、人が集い、地域全体が活性する復興に向けて、息の長い支援をしていきます。



蕪島の中心にある蕪嶋神社とウミネコ。ウミネコが島全体を覆い尽くす風景には圧倒される。（提供：八戸市）



【復興構想図】 過近接でウミネコに脅威を与えている駐車場を移転し、跡地に築山園地、その築山に埋め込んだ休憩観察舎などを提案。他にも、蕪島全体を眺める滞留拠点、アンジュレーション豊かな斜面と一体のプロムナードなど地区全体の整備構想をまとめた。さらに、寂れた駅前通りのホスピタリティ・ディベロップメントの提案など市全体のまちづくりを支援している。

○プロジェクトに関する問い合わせー
アジア生物資源環境研究センター
教授 堀繁
shori@anesc.u-tokyo.ac.jp
構成：本部広報課（内線：82032）

ひょうたん島通信

大槌発！

第8回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬莱（ほうらい）島という小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から毎月、沿岸センターと大槌町の復興の様子をお届けします。

海の豊かさを利用した養殖生産

緑の山を背に水面は穏やかに陽光を反射し、夏の三陸らしい風景が広がっている。プランクトン（浮遊生物）とベントス（底生生物）の生態調査のために訪れた7月末の大槌湾は、津波の前と全く変わらない様子を見せている。しかし水面を見ると「あば」（網端、浮き玉）がとても少ない。震災前の三陸では、どの湾にも数多くのあばや筏が海面に浮かび、カキやホタテ、ワカメの養殖が活発に行われていた。津波により施設ばかりでなく、種苗を作るための天然母貝も失われてしまったが、昨年夏、大槌の漁業者は何とか手に入れた稚貝を使って貝類養殖を立ち上げた。松島湾からカキを、北海道からホタテを入手したと聞いた。

こうして再開した養殖は驚くほどの貝類の高成長を得て、カキは既に出荷が始まっていた。これまで3年かかったところを1年での出荷である。ワカメ養殖も大成功で、この春には例年になく品質の良いワカメが収穫され、今は来春に向けたワカメの種苗系の採苗作業が最盛期を迎えている。ホヤの養殖もこの夏から再開されており、これから貝類・ワカメ養殖の規模が増していくだろう。

カキやホタテ、あるいはワカメの養殖は、成育に必要な餌（プランクトン）や栄養塩（窒素やリン、ケイ素の無機塩）を天然の海水中

に求めることから「無給餌養殖」と呼ばれる。海の豊かさに依存した営みである。海の豊かさをひとりで表すと栄養塩の供給量の多さになる。大槌湾はその地形と海洋学的な特性から湾内外の海水交換が活発で、湾外から栄養塩濃度の高い海水が底層に沿って湾内に入り、湾内水は表層を通過して湾外に流出する循環が存在する。この循環で供給される栄養塩は、養殖ワカメだけではなく、天然の海藻類や植物プランクトンに利用される。一方、植物プランクトンは湾内の動物プランクトンやその他の植物を食べる動物の餌になるとともに養殖カキ、ホタテの餌となる。震災後、無給餌養殖が大成功なのは、以前よりも養殖規模が縮小したため生物間での栄養塩や餌の競争が緩和されて成長が良かったためと考えられる。

今後、養殖規模が拡大するにつれて餌や栄養塩の競争が起こることが予想される。競争が過度になれば養殖生産の効率は低下し、生態系はやせてしまいかねない。海の豊かさを持続的に利用するには、環境収容力に見合った養殖規模が求められる。それを決めるために、海水流動、栄養塩供給、プランクトンやベントスの群集動態、養殖生物の成長などをふまえた生態系内の物質循環の理解が大いに役立つに違いない。

古谷 研（農学生命科学研究科教授）



【上】大槌湾の「あば」。津波前に比べると遥かに少ない。【中】蓬莱島と調査船「グランメーユ」（フランス語で「大きな槌」の意）。【下】「グランメーユ」上での観測風景。



かわべこらむ

◆キズあとに残る白い砂浜 — Boys of Summer —

国際沿岸海洋研究センター専門職員・川辺幸一です。大槌町にある沿岸センターで震災に遭いました。今は、釜石市から提供を受けた仮設住宅に住み、そこから大槌町中央公民館内にある復興準備室に通勤しています。

国際沿岸海洋研究センターより車で約15分程のところにある吉里吉里（きりぎり）海岸。

透明度の高い海と歩くとキュッキュッと鳴る「鳴き砂」の海岸として岩手でも有名な海岸です。震災前、夏になると多くの人びとが海水浴に訪れて賑わいをみせていた場所ですが、今はほとんど人の姿を見かけません。

震災後、大きなガレキや流木などで汚れた海岸は、自衛隊や地元の漁業組合、町役場の皆さんが撤去作業を行い、1年を過ぎた今でも綺麗な砂浜を復活させるべく、ボランティアの皆さんを中心に清掃活動が続いています。

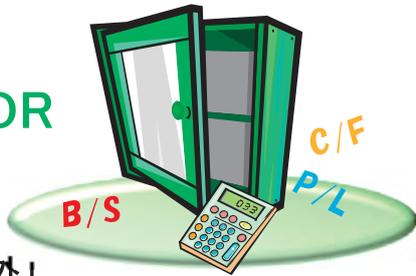
しかし写真をご覧くださいと分かるように、海岸にはまだに防潮堤の残骸が残っており、表面は綺麗な砂浜も少し掘り起こしてみれば石やガラスが出てくる状態です。

町にあふれるガレキの処理、仮設住宅に代わる住宅地の開発、防潮堤の整備など、さまざまな問題が山積みの被災地。それらの問題を解決していくことが最優先なのでしょうが、以前のような綺麗な海岸を取り戻すことも被災地・大槌町として希望のひとつになるのではないのでしょうか。

決算のDOOR

～数字が語る
東京大学

第23回「内」と「外」



下の2枚の写真、どこの建物かすぐ分かったアナタ、かなりの東大通です。左は赤門すぐ右手にある理学部2号館。主に生物科学専攻の研究室が在籍しています。右は農学部正門左手の弥生講堂アネックス。定員80名のホールや講義室を兼ね備えた建物です。規模や見た目は違えども、どちらの建物も教育・研究目的で大学が所有し、管理している点では全く同じ。ですが、会計的には大きな相違点があります。そのカギが平成16年、東京大学が法人化になった年。建物の竣工日がこれより前になるか後になるか…それが違いに繋がるのです。



建物名称:理学部2号館
構造:鉄筋コンクリート造
4階建
竣工年月:昭和9年9月

建物名称:弥生講堂アネックス
構造:木造2階建
竣工年月:平成20年8月
備考:民間企業からの寄付

ところで皆さん、国立大学法人の使命って何でしょう？それは「我が国の高等教育及び学術研究の水準の向上と均衡ある発展を図る」こと（国立大学法人法第1条）。この使命を国立大学が果たすため、国が法人化時に各大学に用意したのが「住まい」と「お金」でした。ただし、大学の基盤となる「住まい」—土地や建物（承継資産）は国の許可なく売ったり、住所の変更はできません。代わりに「住まい」の更新費用は国が措置する仕組み（施設整備費補助金）になっています。一方、大学の基盤となる「お金」—教育・研究を実施するための運営費交付金は、大学の自主性、自律性にお任せで、国は一切ノータッチ（もちろん中期目標・中期計画で約束した教育・研究を責任を持って実行することが前提ですが）。

こうした国の関与か否かが最も如実に表れるのが損益計算書（PL）です。国立大学法人の損益計算書は大学が中期目標・中期計画に記載された業務を果たすために行った活動報告。つまり大学に任された業務の報告書です。一方、国が関与する（大学の責任の範疇外）部分、例えば理学部2号館のような平成16年4月に国から引き継いだ建物の償却費用（価値の減少額）は「損益外減価償却累計額」としてカウントされ、損益計算書には決して載ることはないのです。

ちなみに、23年度の損益外減価償却累計額は112億円。この112億円をカバーする23年度の施設整備費補助金は75億円。法人化の前ほどおりににはなかなかいかず、運営費交付金や自己収入を施設整備に補っているのが現状です。以前行った理学部2号館の一部改修費用も運営費交付金で賄いました。本来、運営費交付金は大学が責任を持って教育・研究を行うため、使命を果たし続けるための基盤財源であり、施設整備のためのお金ではないはず。とはいえ「無い袖は振れぬ」のが現実だと思わないといけなんでしょうか。（青）

本部財務部決算課 (内線22126)

E-mail: kessanka@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

◆このコラムは一見複雑な国立大学法人会計をわかりやすくご紹介することを目的とし、文章の読みやすさを重視しているため、ある程度恣意的な表現を取ることがあります。あらかじめご了承ください。—ご意見、ご質問お待ちしております！

◆次回(1429号)は筆者夏休みのため、お休みさせていただきます。

★ インタープリターズ・ バイブル

vol. 61



科学技術インタープリター養成プログラム

科学論も変化する

岡本 拓司

総合文化研究科 准教授
教養学部附属教養教育高度化機構
科学技術インタープリター養成部門

20年近く前、クーンの科学論に現れるパラダイムには、或る一定の見方で世界全体をとらえることを強いる(理論負荷性)という点で、カントの認識論の「ア・プリオリ」と同じ機能があるのだが、カントの場合には相対主義を克服する根拠とされるものが、パラダイム論では却って相対主義に導くという指摘に出会った(加藤尚武「パラダイム相対主義」批判)。確かにその通りであり、パラダイム間で対話は成り立たないとする「通約不可能性」に基づく相対主義が、この議論の特徴である。指摘には納得したが、その後、それはなぜかという疑問が、答が見つからないまま漠然と残った。

今年の夏学期に科学論を扱った際、加藤論文と偶然一緒に取り上げた論文を読んで、そこに答が書かれているのに気づいた。この論文(廣松渉「科学論の今日的課題と構案」)も同じ頃読んでいたが、充分理解していなかったらしい。

廣松論文でも、理論負荷性がすでにカントによって主張されていることが指摘されるが、カントや彼に続く哲学者が20世紀初頭に至るまで前提とすることができたのは、ニュートン力学やこれに倣った数理物理学の不変性・不動性であったとも述べられている。ニュートン力学の時空観が普遍的な認識の根底にあるとしても、或いはだいが譲って学問の作り方の模範が数理物理学にあるとしても、歴史を越えて有効な認識や学知の枠組みが、特権的な地位を占める実在の理論によって保証されていることになる。この唯一の理論が、1930年くらいまでに絶対のものでなくなったこと、具体的には相対論・量子力学がそれ以前の物理学に取って代わったことが、認識論・学問論にも変革を迫った。1962年に現れたクーンのパラダイム論は、1930年頃に終わった物理学上の変革に対応した科学論であり、理論ごとにならば「ア・プリオリ」が存在し、かつ理論は複数あつて交代しうるとしたために、相対主義という帰結をもたらした。

パラダイム論の影響は大きく、科学も他の学知と同様、その歴史には基礎理論の交代が見られ、また交代を支配する合理的基準はないということになった。これは正しそうであるが、しかし主張されているのは、科学と他の学知との共通性であり、これだけでは、科学はそれでもほかの学問とは異なるという実感には応えられない。相対論・量子力学による変革に対応しながら、今度は科学が他の学知とどう異なるのかを示す議論が必要である。

★科学技術インタープリター養成プログラム
<http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp/>



Crossroad ~産学連携本部だより~ Vol. 81

Crossroadとは、産業界と大学がクロスする場所の意味をこめます



山本 貴史社長

大学で生まれる知と社会における課題を結びつけ、課題解決へ向けたイノベーションを創りだす産学連携本部。本学で生まれた技術を基にした知的財産の社会への展開を図る (株)東京大学TLO(以下、東大TLO)と緊密に連携し、高度な技術移転戦略を行っています。ガラパゴス化とグローバル化の狭間で揺れる日本の産業界において、いまだんなことが必要とされているのでしょうか。今回は知的財産部の小蒲哲夫部長と、東大TLOの山本貴史社長にご登場いただきます。



小蒲 哲夫部長

“知”を扱う立場から。

東大の知的財産部と当社との連携はとてもよくできていると思います。大学のミッションは教育と研究であるはずなのに、最近、特許出願することが目的化しているように感じます。技術を移転することが出願の目的であって、なんでもかんでも出願するのは違うとは思いますが、

大学の研究は基礎研究が多いので、その基礎研究の中で、今すぐ事業化できる技術だけを出願するという点についても、やはり違うと思います。特許の存続期間は出願から20年ありますので、その中で事業化できる可能性があるものは追いつけるというのが、大学の本来のあり方ではないでしょうか。

オープンイノベーションという言葉は日本の企業も使いますが、外部の研究シーズを使って新しい製品を生み出していくという視点はまだ弱いと思いますね。イノベーションを起こすことを目的にするのであれば、よそのおもしろい研究シーズをどんどん導入していく発想になっていくはずですが、

日本の強みって技術だと思んですが、技術を生かし、使えるような国の構造にまだなっていないようです。だからこそ、いま産学連携が求められているのではないのでしょうか。

皆さんからよく、東大TLOと知的財産部の業務内容についてお問い合わせをいただくのですが、一言でいえば、大学側がポリシーや規則を決めたうえで、実際の運用を東大TLOに業務委託し、最終決定は知的財産部が責任を持つという業務分担になっています。契約関係では、決裁権限が部局にある契約は各部局と産学連携本部で扱い、共同出願やライセンスといった決裁権限が産学連携本部にある契約業務は東大TLOと産学連携本部で行います。法人化直前の2003年から、東大TLOとコンタクトを密にとることで誤解などをすぐに解決してきましたので、往々にして生じやすい意見の食い違いを数限りなくやっつけてきたところが、成功要因として非常に大きいと思います。

オープンイノベーションでは、技術が流通する市場があることが大前提です。さらに、どういビジネスモデルを持てるかが、オープンイノベーションの大きなカギといえるでしょうね。海外の企業と、NIH症候群(※)から抜け出せない日本企業では、ずいぶん違いがあるように思います。(※:ある組織や国が別の組織や国が発祥であることを理由に、そのアイデアや製品を採用しない、あるいは採用したくないこと)



SanRen 対談

ニッポンの 知を動かす

The University of Tokyo のポテンシャル



お陰さまで特許のライセンス収入が順調に伸びてきています。今後、社会でさらに実用化されてランニングロイヤリティが入るようになったら、また素晴らしいことですね。お金が目的ではないのですが、大学の技術が実用化され、社会に役立つ、普及することは非常に重要なことで、それが正のサイクルに回るとは非常に大切なことと言えます。



ライト兄弟が初めて飛行機で飛んでから、60年ほどで人類は月まで行ったわけですが、東大の産学連携は、今、頑張って飛行機を飛ばしている段階だと思えます。東大の技術を扱う手前、世界の大学関係者や企業の方々や情報交換をしますと、東大の技術レベルが世界的にかなり高いことを日々、実感しています。また、ここ数年はオープンかつアクティブに変化し始めた日本の大学とのコラボレーションを、欧米の企業が本気で考え始めた手ごたえを感じています。レベルの高い技術が生まれるのであれば、ポテンシャルは十分にあると思うんですね。



優れた技術や研究成果としての発明の創出支援や発掘に、さらに取り組んでいきたいところですね。発明届や出願数、そして特許収入についても、現在、本学が日本のトップクラスにあるわけですから、東大が大学の技術移転におけるドライビングフォースになり、大学の技術移転活動が成功するということを実証したいですね。



日本における東大の位置づけということだけではなく、世界的に見ても東大における産学連携の在り方がモデルになっていくといいですね。東大は、産学連携のドライビングフォースになっていくべき大学でしょうし、そういうミッションを持った大学であると、私は認識しています。

続きはWebで

東大TLOのみなさんをはじめ、本学の先生方や企業の方々とお話をする中で、最後は人と人とのつながり、そこから生まれる信頼関係だと思うんですね。当本部の活動に対するご要望やご質問、ご相談など、ぜひいただきたいですね。 / Tetsuo Ogama

大学の研究を社会に還元する重要性を認識できているアメリカの大学関係者のほとんどが、赤字であっても基礎研究の事業化に取り組んでいます。大学の研究が世に役立つことを示すことによって、日本をもっと元氣な国にしたいですね。 / Takafumi Yamamoto



SanRen対談

検索

連絡先：産学連携本部 (内線22857)
WEBサイト：<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

このページでは、政策ビジョン研究センターが現在最も重要視しているトピックスを中心に、そのときどきのホットニュースをお届けします。

市民後見人養成講座修了式

後見の質を上げる時代へ

7月15日、政策ビジョン研究センター主催で平成23年度市民後見人養成講座の履修証明書授与式が安田講堂にて行われた。全国25都道府県から受講した669名のうち、10カ月125時間のプログラムをすべて修了した600名に対し、学校教育法105条に基づき履修証明書が交付された。

授与式開会にあたって当センター市民後見研究実証プロジェクト運営委員会委員長の森田朗特任教授は、本学と受講生が連携して市民後見を推進し、高齢者個々の課題を実際に解決しながら、高齢化する地域や社会の在り方について政策提言をしていくことに意義があると挨拶した。

続いて、市民後見研究実証プロジェクト担当の宮内康二特任助教から、受講生の内訳、市民後見人養成講座の概要と成果についての学事報告があった。今回の受講生は、北海道から福岡までの25都道府県にわたった。年齢は20～83歳（平均年齢54歳）、男女比は45対55である。このうち後見経験者は2%、介護経験者は55%だった。座学は、成年後見制度の仕組み、後見人の仕事（1000ページを超える事例集）、被後見人等の声、後見に関連する相続・遺言・信託の仕組みと事例、その他について1日4コマで13日間、計75時間行われた。活動は、補助類型の本人申し立て演習、地域における成年後見

の実態把握、グループホーム等における認知症高齢者や障がい者との交流、後見人への同行、その他で合計50時間であった。修了生600名（修了率89.7%）のうち、親族の後見人等になった方は3名、親族以外の後見人について申し立てを行い現在審判待ちの方は3名、後見が必要な人のために成年後見の申し立て支援をした方は9名、新しく誕生する市民後見NPO法人等は21法人となっている。

その後、修了生スピーチとして、12組15名より発表があった。その中には、受講生14名で横浜市において市民後見NPO法人を立上げ、7月中旬に認証申請をするグループもあった。メンバーが経営するグループホームで後見ニーズが3件あるため、法人設立を待たずにメンバー個人が複数で候補者となって申し立てを準備している。また、受講中に独居の母（認知症）の補助開始を申し立て、補助人に選任されたさいたま市在住の方や、施設利用者の親族後見人に対し、良い後見をしてもらうために助言・指導をし意識づけを行った三鷹市在住の高齢者施設勤務の方、発達障がいの親の会で成年後見制度利用に関するアンケート調査を行うとともに、障がい者・高齢者施設で制度を知らせるためのセミナーを開催した旭川市在住の方など、状況に応じてよりよい市民後見を実現するための様々な工夫がなされている事例が明らかになった。

成年後見制度立法責任者であった元法



森田朗特任教授による開会宣言では、個々の課題解決を政策提言に結び付けていくことの意義が述べられた。

務省の小池信行氏は次のように語った。「東大の関与により、後見人がつけばいいという時代から後見の質を向上させる時代に移行した今、市民後見人の活躍が期待される」

最後に市民後見人養成講座運営委員会委員長の牧野篤教授（教育学研究科）より「高齢者や障がい者自身が諦めてしまったら介護も後見もサポートのしようなくなる。高齢過疎化の地域だからこそ、世代を超えて認め合い、新しい地域の仕組みを創りましょう」というエールが送られた。

平成20年度文部科学省社会人の学び直し委託事業により医学系研究科で始まった本講座の修了生は、これで1520名となった。修了生は約270の地元自治体において、成年後見の啓発、利用支援、および後見人の受任といった地域活動を行っている。なお、平成24年度の養成講座は10月6日から5期生350名でスタートする予定である。

医療機器の特性を踏まえた規制の具体化を

佐藤 智晶 特任助教

第2回医療イノベーションワークショップ（7月25日開催）は、医療機器の特性を踏まえた規制とはいったいどのようなものなのかという、シンプルな問いから企画された。医薬品と医療機器が医療関連製品として違うことは分かる。しかし、医療機器のための規制が医薬品と異なるとしたら、それは具体的にどのようなものだろうか。

医療機器は、医薬品とは決定的に異なる製品である。まず、医療機器は医薬品とは違い、原則として医師の手技を介さずして効果を発揮することができない。また、医薬品よりも

種類が極めて多く、部材から構成されるが、比較的短いプロダクトサイクルで部材や設計が改良される。このため、より使いやすく、有用な製品へと絶え間なく改善されていく特性がある。一方、医薬品には代替的な設計が存在しないため、化学物質を特定し、その用量に応じた変化を臨床試験で調べる以外に安全性や有効性を知る術はない。このため、市販前にはいかなる製品でも一律に臨床試験が義務づけられている。こうした規制は医療機器にも馴染むのか、馴染まないとするほどのような規制がありうるのかについて、われわれは侃々諤々の議論をした。

政府は2012年6月6日に「医療イノベーション5ヵ年戦略」で、医療機器の特性を踏まえた規制のあり方を検討することを決定した。

具体的には、医療機器の審査の迅速化・合理化を図るため、薬事法について医療機器の特性を踏まえた制度改正を行う。わが国において医療機器の特性を踏まえて薬事法の改正を行う方向性が打ち出されたことは、画期的なことだ。

米国では、1970年にまとめられた「Cooper Committee Report」に基づいて、1976年に医療機器規制のための法律が連邦議会でも可決成立した。欧州では、1985年に市場統合の方向性が決定され、1990年代になってようやく医療機器規制のための3つの指令が、欧州委員会でも段階的にまとめられた。日本も欧米と同様に、医療機器の現実に即した規制創造への道を間違いなく進んでいる。

<http://pari.u-tokyo.ac.jp>

「日本・アジア学」講義紹介

『グローバルエコノミーと
インドの開発と環境』
(地域文化特別講義I)

近い将来世界一となる人口を有し、酷暑と酷寒、豪雨と日照り、豊穡と枯渇というような極端な対照性を特徴とするインド社会は、その両極端を包摂しながら成長を遂げてきました。1960年代からの緑の革命、1990年代からの経済開放政策への移行は、いずれも現在に至るまでインド社会を大きく変化させてきました。そしてその成長は、21世紀の世界の動向を左右する大きな要因となるであろうと予測されています。しかしながらインドの開発と経済発展が貧困・格差という経済的問題だけでなく、汚染や廃棄物問題など様々な問題を生起してきていることも事実です。

本講義ではインドを中心とする南アジアの開発と環境の問題を、最新の研究に従事している学内外の研究者の協力を得て、皆さんとともに考えていくことを目指します。18世紀から現在に至る幅広いタイムスケールとグローバルエコノミーの展開に対する理解を深め、経済発展と環境変動という側面から現代インドを長期的変動の中に位置づけ、現在生じている様々なイシューとその解決法について議論します。人類学、経済学、歴史学、農学、ジェンダーなど様々なバックグラウンドを持つ南アジア研究の専門家を講師として招き、様々な観点からアプローチすることで南アジアの現場の実態に迫ろうと試みます。

受講者は医学系や工学系、人文系と多岐に渡ります。南アジアが専門であるか否かにかかわらず、発展途上地域の実情や開発・環境問題を理解するための多様なアプローチを学びたいという学生が積極的に発言し、毎回活発な議論が行われます。南アジアのみならず、世界の開発・環境問題について理解を深めたいという方にお勧めの科目です。



講義風景 文・写真:和田一哉

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク（ASNET機構）は、研究者や学生が分野を超えて繋がり、アジアに関係する教育や研究の新たな可能性を探るために設立された東京大学の機構です。

アジアのことを広く、深く知りたい学生の皆さんに研究科等横断型「日本・アジア学」教育プログラムも実施しています。詳しくは下記のURL：

<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/>

ASNET機構

検索

ワタシのオシゴト 第78回

Rings around the UT

学生相談ネットワーク本部なんでも相談コーナー 係長
福井 諭さん

ココロのスキマ、お埋めします



なんでも相談コーナーのマスコットとのツーショット

安田講堂2Fのなんでも相談コーナーの福井です。なんでも相談とはなんぞや？と思われた方もいらっしゃるかもしれませんが、なんでも相談コーナーは一言でいえば学内における相談施設等の総合案内窓口ということになります。どこに相談すればよいかわからない、ちょっとしたことを気軽に聞ける場所があれば、などの悩みやニーズに対してより適切な相談窓口へ繋ぐ、あるいは可能な限りワンストップ・サービスで対応する、というのが基本的な役割です。相談の中には難しいものもあり、勉強の毎日ですが問題の深刻化を未然に防ぐセーフティネットとなるよう頑張っています！ 学生・教職員・保護者が対象で、予約の必要はありませんのでどうぞお気軽にご利用ください。仕事以外では、職員仲間と組んだ泪橋FCというチームで休日や仕事帰りにサッカーをしています。個人的な目標は天皇杯で優勝して、マンUに入団し、香川とコンビを組んでプレミアリーグを制覇することです(笑)。先日は気合いが入りすぎてサッカーの途中で鼻血を出してしまいました(笑)。血で染まった右手を見て思わず叫んだ一言は、「なんじゃこりゃあ！！！」



泪橋FCのメンバー(ほんの一部です)

得意ワザ：鼻血を出して松田優作のマネをすること。
自分の性格：超マイペース。ファンタジスタ(天然)。
次回執筆者のご指名：佐藤悠さん
次回執筆者との関係：泪橋FCのチームメイト。
次回執筆者の紹介：天は二物を与えた！東大の妻夫木聡。

■救援・復興支援室の活動(7月～9月)

- 7月23日・・・第14回救援・復興支援室会議
- 8月2日～8月27日・・・平成24年夏季ボランティア隊の活動
活動場所:岩手県大槌町及び陸前高田市
第1班 8月 2日～ 6日<4泊5日(うち車中1泊)>
第2班 8月 9日～13日<4泊5日(うち車中1泊)>
第3班 8月23日～27日<4泊5日(うち車中1泊)>
- 8月17日～24日・・・福島県大熊町の避難生徒への学習支援ボランティア
活動場所:大熊中学校(福島県会津若松市内)
- 9月8日～10月28日・・・福島県相馬市の学習支援ボランティア
活動場所:相馬市内の応急仮設住宅集会所
活動期間: 9月 8日(土)～ 9日(日)
 9月29日(土)～30日(日)
 10月13日(土)～14日(日)
 10月27日(土)～28日(日)
- 9月26日・・・第15回救援・復興支援室会議

- プロジェクト登録研究 85件 (2012年3月21日現在)
⇒「再生のアカデミズム《実践編》」連載中。P14参照
- 救援・復興支援室の活動の詳細はウェブサイトをご覧ください。
http://www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/info_j.html
- 救援・復興支援室
Email: kyuenfukkou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp 内線: 21750

第6話

分室

救援・復興支援室の遠野分室から、被災地の復興の様子や分室の活動を報告していきます。

遠野ものがたり

「こんにちは。またんけんたいです！」
遠野市立遠野小学校の元気な2年生9名が、遠野分室を訪れてくれました。
生活科の学習「またんけんをしよう」の一環で、グループ毎に小学校周辺の市役所・商店街等で働く人の姿を見学・質問しながら、自分達の住む遠野市を学習しているとの事。
「みんな東京大学って知ってる？」本学が行っている救援・復興・ボランティア活動を、困っている人のお手伝いに置き換えた説明を、全員真剣に聞いてくれました。「何でここに東京大学があるの？」と質問する子供達の輝いた目がとても印象的で、市の担当課・引率教諭からは今後の教育活動への協力依頼もあり、こうしたきっかけ作りや地域交流の重要性を改めて認識しました。
最後のお願いに、「はい！」と全員元気に答えてくれました。
「沿岸地域には、まだまだ困っている人が沢山います。これからも沢山勉強して、困っている人を助けてあげる人になって下さい。」
「説明がわかりやすかったです！」と言って貰えて良かった・・・汗どんどはれ・・・

文: 赤崎公一



「またんけんたい」の様子



真剣に説明を聞く様子

執筆者紹介: 救援・復興支援室遠野分室勤務(総合企画部企画課係長) 赤崎公一氏。
東日本大震災にて実家(岩手県大槌町)が津波で全壊し、家屋・家財すべて流失。
昨年7月より、妻と子(当時1歳)とマンションのローンを東京に残し、岩手県遠野市に移住。現在は、被災した母(65歳)と高校卒業以来の同居生活中。
連絡先: tohno-kyuenfukkou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

コミュニケーションセンターだより No.91

■蓮香ハンドクリーム 大好評です!!

まだまだ寝苦しい日々が続いておりますがいかがおすごでしょうか。

先月号でお伝えいたしました、「蓮香ハンドクリーム」ですが、大変ご好評を頂いており、お客様からも喜びの声を沢山頂いております！今回はスタッフの濱中利奈さんから、ハンドクリームについてご紹介致します。

～～～
こんにちは！暑い日が続いてますね！

こんな時は大賀蓮のさわやか、そしてみずみずしい香りで涼しさを感じてみるのはいかがでしょうか？

8月1日より、蓮香シリーズに新商品のハンドクリームが登場しました。肌につけるとすぐになじんでべたつかず、サラサラ感が持続しますので夏場でも、またハンドクリームが苦手な方でもとても使いやすい商品です。シャンパンゴールド色のリボンをあしらったパッケージなのでプレゼントにも喜ばれる事間違いなしです！ぜひコミュニケーションセンターでお手に取ってお試し下さい。

法学部4年 濱中 利奈



ハンドクリームコーナー(一部)ご紹介。店内は蓮香のいい香りに包まれています！



レジ付近にも陳列してあります！

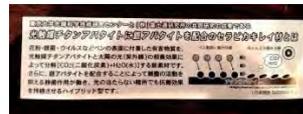
■新商品情報!!

世界初! 抗ウイルス 抗菌ボールペン

またまた8月1日より新商品が登場です。先端科学技術研究センターと株式会社富士通研究所との共同研究成果商品「抗ウイルス 抗菌ボールペン」です。ペンに付着したウイルスや花粉などの有害物質を分解、さらに、雑菌の活動を抑え、抗菌効果を持続させる優れもの！東京大学の研究成果を身近に感じられるということで発売当初より人気を博しています。書き味も良く、可愛い小型サイズです。皆様のペンケースにもお一ついかがですか？



黒・青・赤の3色ボールペンです。



詳しい商品説明もついています。500円(税込み)

担当: UTCC山下



The University of Tokyo

東京大学コミュニケーションセンター
The University of Tokyo
Communication Center

OPEN: 月曜～土曜 10:00～18:00

電話: 03-5841-1039

<http://www.utcc.pr.u-tokyo.ac.jp>

梅雨空に金星をおいかけて



梅雨空の本郷キャンパスより撮影した、金星の太陽面通過、太陽視野角度32分、金星視野角度1分。
 【左】2004.6.8 17:14 食の最大 フィルター有。【右】2012.6.6 13:18 食の終わり頃 フィルター無
 (撮影：大学院医学系研究科・医学部 中嶋信さん)

三四郎池～敷石～



犬も歩けば棒に当たる。猫も歩けば石につまずく。で、吾輩は猫である、ので用心深く歩いて、漱石先生の足跡を探していると、おや！こりゃ、何？ニヤーン。ニヤンとも分からんニヤー。
 (撮影：文学部 田中善和さん)



生態調和 農学機構 西東京フィールド

旧農場・田無演習林の風景です。【左】かつて販売されていた「東大牛乳」のケース。【右】昆虫もたくさん生息しています。
 【下】広がる水田風景。
 (撮影：本部広報課)



INFORMATION

募集

募集

大学院人文社会系研究科・文学部

平成 25 (2013) 年度 大学院人文社会系研究科入学試験日程を公表

7月21日(土)から「平成25(2013)年度大学院人文社会系研究科修士課程及び博士課程学生募集要項」の配付を開始しました。日程は以下のとおりです。

【修士課程】

第一次試験(筆記試験) 平成25年1月26日(土)
第二次試験(口述試験等) 平成25年2月13日(水)
※ 現代文芸論専門分野、文化資源学研究専攻及び韓国朝鮮文化研究専攻の第二次試験は、2月12日(火)に行います。
※ 文化資源学研究専攻については、社会人特別選抜での受入れ(日本人及び日本国の永住許可を得ている者に限る)も行っています。

【博士課程】

第一次選考 論文審査等
(専門分野によっては、平成25年1月26日(土)に学力試験を実施)
第二次選考 口述試験等 平成25年2月15日(金)
※ 現代文芸論専門分野、文化資源学研究専攻及び韓国朝鮮文化研究専攻の第二次選考は、2月14日(木)に行います。
※ 文化資源学研究専攻については、社会人特別選抜での受入れ(日本人及び日本国の永住許可を得ている者に限る)も行っています。

また、出願期間は以下のとおりです。

【修士課程】

平成24年10月22日(月)～10月26日(金)
(郵送のみ受付。26日(金)必着)

【博士課程】

平成24年12月3日(月)～12月7日(金)
(直接持参又は郵送。7日(金)15:00必着)

募集要項の郵送を希望する場合は、封筒の表に「○○課程学生募集要項請求」と朱書きし、郵便番号・住所・氏名を明記して、200円分(修・博等2部必要な場合は240円分)の切手を貼付した返信用封筒(角型2号)を同封し、以下へ送付してください。

〒113-0033

東京都文京区本郷7丁目3番1号

東京大学大学院人文社会系研究科 事務部

電話 03-5841-3710, 3712 (大学院係)

お知らせ

お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

駒場博物館特別展「石の世界 —地球・人類・科学—」

地球は半径6400kmの岩石の球であると言えます。地球全体の17%を占める中心部は金属鉄で、残りの約83%は岩石で構成されています。この岩石の球の上に、薄い海洋と大気が覆い、生命の惑星・地球がかたちづくられています。

地球は密度成層構造をつくっています。密度の大きい金属鉄が中心部を構成し、密度のより小さい岩石がマントル、そしてもっとも密度の小さい岩石が地殻をつくって、その上に海洋、そして大気が、密度の小さくなる順番に外側を覆っています。この密度成層構造は安定なもので、通常それがひっくり返ることはありませんが、同じ岩石や、海洋、大気の層の中では、密度の逆転が起きることがあり、対流による放熱のしくみがはたらきます。それが生きている地球の活動の原動力です。

私たちが暮らす地表は、地殻と呼ばれる岩石の層の上にあります。地殻には海洋地殻と大陸地殻があります。斑禰岩(はんれいがん)を主とする海洋地殻は表面の7割を占める海洋の底を構成しています。大陸地殻はより密度の小さい、花崗岩(かこうがん)や変成岩を主としていて、海水の上に顔を出して、陸域をつくっています。海洋地殻は2億年以内にマントル対流によって地球内部

に戻され、更新され続けますが、大陸地殻は軽いために表面に残り続け、40億年にわたる地球の歴史を記録しています。

人類の歴史もまた、石とともに歩んできた歴史といえるでしょう。初期人類が使った石器は、250万年前の地層からも発見されています。ストーンサークルやピラミッドといった建造物、そして石から取り出した様々な金属の利用など、文明の発展には常に石が関わってきました。そして現在の情報化社会の中で、半導体や光ケーブルなど産業の土台を支えるのは、石英というありふれた存在の鉱物なのです。

道ばたの石ころにもそれぞれ生まれてきた理由があり、その場所に至るまでの歴史があります。そしてそれらの情報はすべて石の中に記録されています。過去数十万年の氷期-間氷期の気候変動と、最終氷期以降の文明の消長も、地層や氷という鉱物の中に記録として閉じ込められています。

石を通して、私たちの足もとをもう一度見つめ直す機会になればと思います。

詳細はホームページをご覧ください。

<http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/index.html>

会場 駒場博物館

会期 7月21日(土)～9月17日(月・祝)

開館時間 10:00～18:00(入室は17:30まで)

休館日 毎週火曜日

入館料 無料

問い合わせ先 駒場博物館 03-5454-6139(内46139)

E-mail: komabamuseum@adm.c.u-tokyo.ac.jp



お知らせ

本部情報基盤課

「医学・生命科学系論文の探し方」など“情報探索ガイダンス”各種コース実施のお知らせ

講習会に参加して、文献の探し方の基本をマスターしましょう！

情報基盤課学術情報チームでは、定期的に、“情報探索ガイダンス”各種コースを実施しています。

実際にパソコンを操作しながら実習するので、わかりやすいと大変好評です。

本学にご所属であれば、学生・教職員を問わず、どなたでも参加できます。ぜひご参加ください。

※学外からの利用方法はどのコースでも説明します。

■ 9/7 (金) 15:00～16:00

【文献検索早わかり】

これから文献検索をしてみたいという方向けに、学内での文献入手方法と、テーマから雑誌論文(日本語・英語)や新聞記事を探す方法の基本を、代表的なデータベースを使って実習します。文献検索の入門編としておすすめです。「はじめての論文の探し方」コースと新聞記事検索以外は内容が重複します。ご了承ください。

■ 9/11 (火) 15:00～16:00

【ネットで検索! 日本語論文&英語論文

: CiNii ArticlesとWeb of Scienceを使って】

普段はインターネットや参考書等で情報を集めているという方、そろそろ文献データベースを使って本格的に学術論文検索をはじめましょう。その第一歩として、日本語論文・英語論文の代表的データベース、「CiNii Articles」と「Web of Science」の基本的な検索方法を実習します。

■ 9/13 (木) 15:00 ~ 16:00

【医学・生命科学系論文の探し方】

代表的な国内医学文献データベース「医中誌 Web」と、世界最大級の医学文献データベース「PubMed」について、基本的な検索方法から少し上級向けの検索テクニックまで実習します。もちろん医学部以外の方も歓迎です。

■ 9/20 (木) 15:00 ~ 16:00

【RefWorks を使うには?】

データベースの検索結果等を取り込んで整理し、参考文献リストを自動作成。文献管理ツールはそんな機能を持つ便利なツールです。

これから使ってみようという方向けに、Web 版の文献管理ツール「RefWorks」の使い方を説明します。

代表的なデータベースからのデータの取り込み方と、参考文献リストの自動作成方法を実習します。

■ 9/26 (水) 15:00 ~ 16:00

【もっと使いこなす! RefWorks】

文献管理ツール「RefWorks」を既に使っている方や、最近使い始めた方を対象に、新規データの手入力、コメント欄の活用、重複レコードの削除、参考文献リスト出力フォーマットのカスタマイズ、レコード・アカウントのバックアップ方法などを実習します。質問タイムあり。
※【RefWorks を使うには?】コースの上級編にあたる内容です。

●会場:

【本郷】総合図書館 1階 講習会コーナー 定員 17名
(備付 PC あり。ECCS 無線 LAN 設定済みのノート PC 持込 OK。)

●参加費: 無料

●予約不要

★授業・ゼミ・学生グループなどを対象にオーダーメイドで講習します!

論文の探し方の出張講習・オーダーメイド講習を随時受付中です(無料)。授業やゼミの内容に合わせて講習いたします。会場のことなど、ご相談に応じます。まずはお気軽にお問い合わせください。どのキャンパスでも、学生だけのグループでも OK です。

過去の実施例は以下の URL でご覧いただけます。
(<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/shuccho.html>)

★ Litetopi メールマガジン発信中!

本学所属の方を対象に、データベースのニュースや講習会のご案内などをお届けします。配信ご希望の方は、下記アドレスまでメールでご連絡ください。(無料)



literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

●お問い合わせ:

学術情報リテラシー担当 03-5841-2649 (内線: 22649)
literacy * lib.u-tokyo.ac.jp
(*は@に置き換えて送信してください。)
<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>
(ツイッター http://twitter.com/gacos_todai)



お知らせ

史料編纂所

重要文化財『実隆公記』ほか所蔵史料を出陳

史料編纂所は、約 140 年にわたり日本全国・世界各地で調査を行い、複成によって史料を蒐集・蓄積して、利用者にも供してきましたが、貴重な史料原本も多数所蔵しています。代表的なものが、国宝『島津家文書』と重要文化財『実隆公記』です。このたび、六本木のサントリー美術館にて開催される「お伽草子」展では、これら二種をはじめとする所蔵史料からの出陳があります。

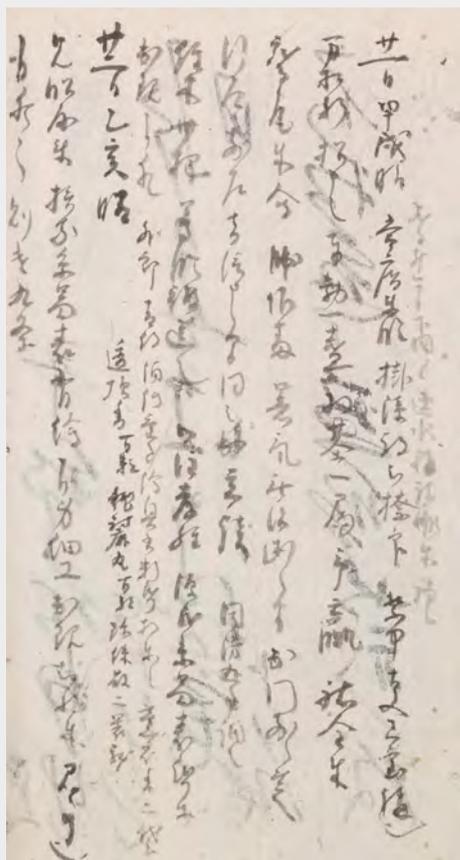
お伽草子とは、室町時代に作られた短編小説のことで、しばしば絵巻物とされて、幅広い階層に愛好されました。本展では、そうした中世から近世初頭の絵画作品約 80 点を一堂に集め、物語・絵巻の制作や享受の様相を伝える文献史料として、本所所蔵の史料が脇を固めます。例えば開催館で所蔵する「酒伝童子絵巻」三巻が、戦国大名の後北条氏に伝わった作品で、狩野元信が描いたことは、当代きっての文化人・三条西実隆の日記である『実隆公記』によって裏づけられます。(なおこの絵巻の詞書は、本所出版物である『大日本史料』第九編之二十、大永三年九月十三日の第二条、349 ~ 384 頁に翻刻され、インターネットからも参照できます。)

歴史史料に対しては保存・修復の責務があり、本部・各部局よりご理解・ご支援を賜っているところですが、展示等にて広くご披露する機会は限られてしまいます。学内各位のご来場をお待ちしますとともに、国内外からのご来客等にもご紹介いただいて、本学の研究活動の広がりをご観覧下さい。会期中に展示替えされますが、本所所蔵史料は各期ともに 4・5 点出陳されます。本所からの出陳史料は、『実隆公記』(重文)、『言継卿記』、『言経卿記』、『上井覚兼日記』(重文)、『中務大輔家久公御上京日記』(国宝『島津家文書』のうち)です。

サントリー美術館（東京ミッドタウン内）
 特別展「お伽草子—この国は物語にあふれている—」
 開催期間 9月19日（水）～11月4日（日）
 開館時間 10：00～18：00
 （金・土、および10月7日（日）は10：00～20：00）
 ※いずれも入館は閉館の30分前まで
 休館日 火曜日
 入館料（当日）一般 1,300円 大学・高校生 1,000円
<http://www.suntory.co.jp/sma/>



『中務大輔家久公御上京日記』天正三年（1575）四月二十八日条



『実隆公記』享祿四年（1531）閏五月二十一日条

お知らせ

大学院工学系研究科・工学部

「第27回東京大学工学部・工学系研究科技術発表会」開催のお知らせ

工学部・工学系研究科では、本年度も「技術発表会」を下記のとおり開催いたします。この発表会は技術系職員が職務上で得た技術的知見を発表し討論を行うことによって、相互技術交流を活性化させることを目的としております。是非ご参加下さるようお願い申し上げます。

日時：9月21日（金）9：30～17：30
 会場：工学部2号館 212号講義室、展示室
 参加費：無料
 問合せ先：技術発表会事務局
 E-mail：2012tse@tse.t.u-tokyo.ac.jp
<http://www.ttc.t.u-tokyo.ac.jp/>

プログラム

【開会の挨拶】 9：30～9：40

【一般発表1】 9：40～10：25

「千葉県東葛飾地区の土壤中の放射性セシウムの分布について」
 ≪サンプリング方法、除染方法の提案≫

応用化学専攻 坂下 春

「雨水の放射能測定」

安全衛生管理室 大久保徹

「福島第一原子力発電所の事故に起因する土浦市実塚の放射能汚染と筈」

システム創成学専攻 細野米市

【特集発表：技術の創意工夫】 10：40～11：40

「X線解析技術向上に向けた取り組み」

総合研究機構 府川和弘

「仮想化による異なるネットワークに接続されたサーバーの制御」

電気系工学専攻 高橋 登

「引張実験における変位計の工夫」

機械工学専攻 石川明克

「X線分光器の分解時間の測定による電子線マイクロアナライザ(E-PMA)の最適分析条件の探索について(I)(II)」

マテリアル工学専攻 中村光弘

休憩（昼食）

【特別講演】 13：00～14：00

「化学やバイオをチップに集積すると」

副学長・工学系研究科（応用化学専攻） 北森武彦教授

【交流発表】 14：20～14：50

「風を知る・見る？—風洞実験と共に—」

生産技術研究所 高橋岳生
「1970～2012：技術職員の仕事から」

生産技術研究所 板倉 博

【ポスター発表】 15：00～15：50

【一般発表2】 16：00～17：00

「X線CT画像を用いた炭素繊維複合材料積層板の内部評価」

航空宇宙工学専攻 小林やよい

「計算機仮想技術によるPCサーバの集約と節電について」

システム創成学専攻 榎本昌一

「電源の安全とノイズ対策を可能にする能動接地」

原子力国際専攻 安本 勝

「グラフィック型言語LabVIEWによる固液共存系成長過程の画像集録と処理」

システム創成学専攻 鈴木 誠

【表彰式・閉会挨拶】 17：20～17：30

【懇親会】 18：00～20：00（参加費3,000円）

お知らせ

大学院理学系研究科・理学部

「第27回東京大学大学院理学系研究科・理学部技術シンポジウム」開催のお知らせ

理学系研究科・理学部技術部では、本年度も「技術シンポジウム」を下記の通り開催します。今回は本郷地区での開催となります。是非ご参加下さい。

●日時：9月28日（金）13：00～17：15

●会場：本郷キャンパス 理学部1号館

西棟206号室および中央棟338号室

●参加費：無料

●プログラム

<技術発表（口頭）>

「生物学科B系共通実習における新規実習の開発」

・渡辺 綾子（生命科学系）

「附属植物園における日本植物園協会拠点園ネットワークの活動について」

・出野 貴仁（生命科学系）

「電子線マイクロアナライザ（EPMA）による微小な希土類鉱物の信頼性の高い測定」

・市村 康治、吉田 英人（機器分析・実習系）

「理学部2号館における環境安全業務」

・塩田 百合香（共通系）

<技術発表（ポスター）>

「理学系液体窒素タンクの運用と設備更新」

・吉田 和行（共通系）、八幡 和志（機器分析・実習系）

「試作室の紹介」

・柏葉朋子（共通系）

「電子線マイクロアナライザ（EPMA）による微小な希土類鉱物の信頼性の高い測定」

・市村 康治、吉田 英人（機器分析・実習系）

「全学技術研修の実施報告 —エレクトロニクスの基礎—」

・佐伯 喜美子（機器分析・実習系）、南野 真容子（共通系）、吉田 英人、八幡 和志（機器分析・実習系）

「FPGA教材の開発 —機器開発とテスト実験—」

・八幡 和志（機器分析・実習系）

「2012年4月4日の暴風による日光分園風倒被害」

・清水 淳子、綾部 充（生命科学系）

「小笠原諸島・母島固有の希少種コキンモウイノデ集団の発見」

・水梨 桂子、出野 貴仁（生命科学系）、邑田 仁（附属植物園・教授）、東馬 哲雄（附属植物園・助教）

<特別講演>

「有機化合物の化学構造決定とスペクトル化学」

・橘 和夫 教授（化学専攻/天然物化学研究室）

●閉会后、情報交換会を行う予定です。

17：45～19：45（要予約）

●お問い合わせ

技術シンポジウム実行委員会

<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/s-tech/>

E-Mail: keiko@ns.bg.s.u-tokyo.ac.jp

FAX: 03-3814-0139（附属植物園）

詳細につきましては、技術部ホームページ（<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/s-tech/>）で随時お知らせいたします。

「大学案内 2013」及び「平成 25 年度入学者選抜要項」の配布始まる

「大学案内 2013」・「平成 25 年度東京大学入学者選抜要項」が決定した。各都道府県教育委員会等に通知するとともに「大学案内 2013」は 7 月 14 日（土）から、「平成 25 年度東京大学入学者選抜要項」は 7 月 23 日（月）から、本郷地区キャンパス〔正門、赤門、農正門、広報センター（龍岡門）、コミュニケーションセンター（赤門脇）、生協第二購買部、生協書籍部〕及び駒場 I キャンパス（正門、生協購買部）で配布を開始した。

また、要項等は東京大学ホームページ、テレメール等からも請求することができる。

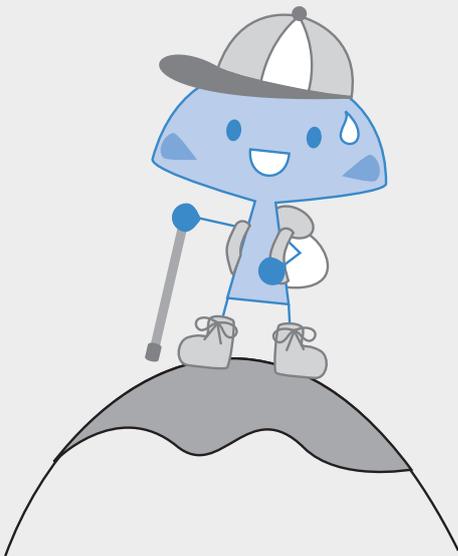
なお、入学者選抜の実施教科・科目等は表 1・2・3 のとおりである。

「平成 25（2013）年度外国学校卒業学生募集要項」の配布始まる

「平成 25（2013）年度東京大学外国学校卒業学生募集要項」が決定し、7 月 1 日（日）から、本郷地区キャンパス〔正門、赤門、広報センター（龍岡門）〕及び駒場 I キャンパス（正門）で配布を開始した。

また、要項は東京大学ホームページ、テレメール等からも請求することができる。

なお、募集人員、出願資格、出願期間、出願手続、選抜方法など、特別選考の概要は表 4 のとおりである。



平成25年度 東京大学入学者選抜（一般入試）前期日程試験の実施教科・科目等について〔文科各類〕

学部・学科等名 及び募集人員等 〔平成24年度 志願倍率〕	学力検査等の 区分・ 日程	大学入試センター試験の利用教科・科目名 注1		個別学力検査等（第2次学力試験） 注2			大学入試センター試験・個別学力検査等の配点等 注3							その他の 選抜方法等	
		教科	科目名等	教科等	科目名等	2段階 選抜	試験の区分	国語	地歴	公民	数学	理科	外国語		配 点 計
文科一類 4.0 401人 前期 その他 401 若干	2月25・ 26日	国歴 公民 数 理 外	国語 世B, 日B, 地理B }から2 倫・政経 数I・数A 数II・数B, 工, 簿・会, 情報から1 物I, 化I, 生I, 地学Iから1 英, 独, 仏, 中, 韓から1 〔5教科7科目又は6教科7科目〕	国 教 地 歴 外	国語総合・国語表現I・現代文・古典 数I・数II・数A・数B 日B, 世B, 地理Bから2 英(英I・英II・リーディング), 独, 仏, 中から1	約3.0倍	センター試験	(200)	(200)		(200)	(100)	(200)	110 (900)	婦国子女 外国人 追加合格
							個別学力検査	120	120		80		120	440	
文科二類 3.1 353人 前期 その他 353 若干	2月25・ 26日	国歴 公民 数 理 外	国語 世B, 日B, 地理B }から2 倫・政経 数I・数A 数II・数B, 工, 簿・会, 情報から1 物I, 化I, 生I, 地学Iから1 英, 独, 仏, 中, 韓から1 〔5教科7科目又は6教科7科目〕	国 教 地 歴 外	国語総合・国語表現I・現代文・古典 数I・数II・数A・数B 日B, 世B, 地理Bから2 英(英I・英II・リーディング), 独, 仏, 中から1	約3.0倍	センター試験	(200)	(200)		(200)	(100)	(200)	110 (900)	婦国子女 外国人 追加合格
							個別学力検査	120	120		80		120	440	
文科三類 3.1 469人 前期 その他 469 若干	2月25・ 26日	国歴 公民 数 理 外	国語 世B, 日B, 地理B }から2 倫・政経 数I・数A 数II・数B, 工, 簿・会, 情報から1 物I, 化I, 生I, 地学Iから1 英, 独, 仏, 中, 韓から1 〔5教科7科目又は6教科7科目〕	国 教 地 歴 外	国語総合・国語表現I・現代文・古典 数I・数II・数A・数B 日B, 世B, 地理Bから2 英(英I・英II・リーディング), 独, 仏, 中から1	約3.0倍	センター試験	(200)	(200)		(200)	(100)	(200)	110 (900)	婦国子女 外国人 追加合格
							個別学力検査	120	120		80		120	440	

注1【大学入試センター試験の利用教科・科目名】欄

- (1) 数学において、「工業数理基礎」,『簿記・会計』,『情報関係基礎』を選択できる者は、高等学校又は中等教育学校においてこれらの科目を履修した者及び専修学校の高等課程の修了（見込み）者だけである。
- (2) 理科において、その試験時間に2科目を受験した場合には、第1解答科目の成績を合否判定に利用する。
- (3) 外国語において、『英語』のリスニングの成績は、利用しない。

注2【個別学力検査等】欄

- (1) 数学Bの出題範囲は次のとおりである。
数学B（「数列」,「ベクトル」）
- (2) 英語試験の一部分に聞き取り試験を行う。（30分程度）

注3【大学入試センター試験・個別学力検査等の配点等】欄

第1段階選抜を行う場合には、表中に掲げる大学入試センター試験の各教科・科目の合計得点（900点満点/各教科の配点は（ ）内のおとり。）により行う。

学力試験の成績は、大学入試センター試験の成績（配点110点：上記の合計得点（900点満点）に900分の110を掛けた値をもってこの成績とする。）と個別学力検査（第2次学力試験）の成績（配点440点）とを総合（550点満点）して算出する。

平成25年度 東京大学入学者選抜（一般入試）前期日程試験の実施教科・科目等について〔理科各類〕

学部・学科等名 及び募集人員等 〔平成24年度 志願倍率〕	学力検査等の 区分・ 日程	大学入試センター試験の利用教科・科目名 注1		個別学力検査等（第2次学力試験） 注2			大学入試センター試験・個別学力検査等の配点等 注3							その他の 選抜方法等		
		教科	科目名等	教科等	科目名等	2段階 選抜	試験の区分	国語	地歴	公民	数学	理科	外国語		配 点 計	
理科一類 2.8 1,108人 前期 その他 若干	2月25・ 26日	国 地歴 公民 数 理 外	国語 世B, 日B, 地理B }から1 倫・政経 数I・数A 数II・数B, 工, 簿・会, 情報から1 物I, 化I, 生I, 地学Iから2 英, 独, 仏, 中, 韓から1 〔5教科7科目〕	国 数 理 外	国語総合・国語表現I 数I・数II・数III・数A・数B・数C 物I・物II, 化I・化II, 生I・生II, 地学I・地学IIから2 英(英I・英II・リーディング), 独, 仏, 中から1	約2.5倍	センター試験	(200)	(100)		(200)	(200)	(200)	(200)	110 (900)	婦国子女 外国人 追加合格
							個別学力検査	80			120	120	120	440		
理科二類 4.2 532人 前期 その他 若干	2月25・ 26日	国 地歴 公民 数 理 外	国語 世B, 日B, 地理B }から1 倫・政経 数I・数A 数II・数B, 工, 簿・会, 情報から1 物I, 化I, 生I, 地学Iから2 英, 独, 仏, 中, 韓から1 〔5教科7科目〕	国 数 理 外	国語総合・国語表現I 数I・数II・数III・数A・数B・数C 物I・物II, 化I・化II, 生I・生II, 地学I・地学IIから2 英(英I・英II・リーディング), 独, 仏, 中から1	約3.5倍	センター試験	(200)	(100)		(200)	(200)	(200)	(200)	110 (900)	婦国子女 外国人 追加合格
							個別学力検査	80			120	120	120	440		
理科三類 5.0 100人 前期 その他 若干	2月25・ 26日	国 地歴 公民 数 理 外	国語 世B, 日B, 地理B }から1 倫・政経 数I・数A 数II・数B, 工, 簿・会, 情報から1 物I, 化I, 生I, 地学Iから2 英, 独, 仏, 中, 韓から1 〔5教科7科目〕	国 数 理 外	国語総合・国語表現I 数I・数II・数III・数A・数B・数C 物I・物II, 化I・化II, 生I・生II, 地学I・地学IIから2 英(英I・英II・リーディング), 独, 仏, 中から1	約4.0倍	センター試験	(200)	(100)		(200)	(200)	(200)	(200)	110 (900)	婦国子女 外国人 追加合格
							個別学力検査	80			120	120	120	440		

注1【大学入試センター試験の利用教科・科目名】欄

- (1) 地理歴史及び公民において、その試験時間に2科目を受験した場合には、第1解答科目の成績を合否判定に利用する。
- (2) 数学において、「工業数理基礎」、『簿記・会計』、『情報関係基礎』を選択できる者は、高等学校又は中等教育学校においてこれらの科目を履修した者及び専修学校の高等課程の修了（見込み）者だけである。
- (3) 外国語において、『英語』のリスニングの成績は、利用しない。

注2【個別学力検査等】欄

- (1) 英語試験の一部分に聞き取り試験を行う。（30分程度）
- (2) 数学B, 数学Cの出題範囲は次のとおりである。
数学B（「数列」, 「ベクトル」）, 数学C（「行列とその応用」, 「式と曲線」）
- (3) 理科の出題範囲は次のとおりである。
「物理I・物理II」 物理I, 物理II（「力と運動」, 「電気と磁気」, 選択範囲からは「物質と原子」のうち、原子・分子の運動（熱力学を含む）を指定）
「化学I・化学II」 化学I及び化学IIの「物質の構造と化学平衡」で学ぶことを基礎とする問題を出題する。題材として、化学IIの「生活と物質」, 「生命と物質」の内容を用いることはあり得る。
「生物I・生物II」 生物I, 生物IIから出題する。生物IIの「生物の分類と進化」, 「生物の集団」の中から出題する場合は、いずれかを履修していない生徒のいることを考慮し、背景を説明した上で総合問題として出題する、選択問題にする、などの配慮を行う。
「地学I・地学II」 地学I, 地学IIの全範囲から出題する。

注3【大学入試センター試験・個別学力検査等の配点等】欄

第1段階選抜を行う場合には、表中に掲げる大学入試センター試験の各教科・科目の合計得点（900点満点／各教科の配点は（ ）内のとおり。）により行う。
学力試験の成績は、大学入試センター試験の成績（配点110点：上記の合計得点（900点満点）に900分の110を掛けた値をもってこの成績とする。）と個別学力検査（第2次学力試験）の成績（配点440点）とを総合（550点満点）して算出する。

平成25年度 東京大学入学者選抜(一般入試)後期日程試験の実施教科・科目等について〔全科類(理科三類を除く)〕

学部・学科等名 及び募集人員等 〔平成24年度 志願倍率〕	学力検査等の 区分・ 日程	大学入試センター試験の利用教科・科目名 注1		個別学力検査等 (第2次学力試験) 注2	大学入試センター試験・個別学力検査等の配点等 注3										その他の 選抜方法等			
		教科	科目名等	教科・科目等	2段階 選抜	試験の区分	国語	地歴	公民	数学	理科	外国語	総合科目Ⅰ	総合科目Ⅱ		総合科目Ⅲ	配点 合計	
全科類 (理科三類を除く) 32.2 100人	3月13日	国 地歴 公民 数 理 外	国語 世B, 日B, 地理B }から1 倫・政経 数Ⅰ・数A 数Ⅱ・数B, 工, 簿・会, 情報から1 物Ⅰ, 化Ⅰ, 生Ⅰ, 地学Ⅰから1 英, 独, 仏, 中, 韓から1 〔5教科6科目〕	総合科目Ⅰ 総合科目Ⅱ 総合科目Ⅲ	約5.0倍	センター試験 個別学力検査	(200)	(100)		(200)	(100)	(200)					(800) 300	追加合格

注1【大学入試センター試験の利用教科・科目名】欄

- (1) 地理歴史及び公民において、その試験時間に2科目を受験した場合には、第1解答科目の成績を合否判定に利用する。
- (2) 数学において、「工業数理基礎」、『簿記・会計』、『情報関係基礎』を選択できる者は、高等学校又は中等教育学校においてこれらの科目を履修した者及び専修学校の高等課程の修了（見込み）者だけである。
- (3) 理科において、その試験時間に2科目を受験した場合には、第1解答科目の成績を合否判定に利用する。
- (4) 外国語において、『英語』はリスニングの成績を含むものとし、筆記（200点満点）とリスニング（50点満点）の合計得点（250点満点）を200点満点に換算して利用する。

注2【個別学力検査等】欄

- (1) 総合科目Ⅰは、英語の読解力と記述力を見る（英語読解・記述を通して、表現力、構成力などを審査する）。
- (2) 総合科目Ⅱは、事象の解析への数学の応用力を見る（自然や社会のさまざまな事象を数学的に解析することを問う。ここで用いられる数学の知識は高等学校又は中等教育学校における数学Ⅰ・数学Ⅱ・数学Ⅲ・数学A・数学B（「数列」、「ベクトル」）・数学C（「行列とその応用」、「式と曲線」）にわたるが、この科目では数学の総合的な応用能力を審査する）。
- (3) 総合科目Ⅲは、文化、社会、科学等に関する問題について論述させ、理解力・思考力・表現力を見る。

注3【大学入試センター試験・個別学力検査等の配点等】欄

第1段階選抜を行う場合には、表中に掲げる大学入試センター試験の各教科・科目の合計得点（800点満点/各教科の配点は（ ）内のおり。）により行う。

最終的な合格者の判定は、個別学力検査（第2次学力試験）の成績（300点満点）に基づいて行う。ただし、判定に必要な場合は、大学入試センター試験の成績や調査書を考慮することがある。

平成25（2013）年度 外国学校卒業学生特別選考

東京大学

実施科類	文科一類，文科二類，文科三類 理科一類，理科二類，理科三類
募集人員	文科一類，文科二類，文科三類 } 第1種，第2種 各若干名 理科一類，理科二類，理科三類 }
出願資格	<p>[第1種] (外国人であって日本国の永住許可を得ていない者) 平成20(2008)年4月1日から平成25(2013)3月31日までの間に，次の基礎資格を取得し，かつ，要件を満たしている者とする。</p> <p>(1) 基礎資格 次のア，イいずれかに該当すること。 ア 外国において，我が国の学校教育12年に相当する課程の最終学校を修了した者及び修了見込みの者，又はこれに準ずる者で文部科学大臣の指定したもの 「外国において，我が国の学校教育12年に相当する課程の最終学校」とは，地理的，場所的に外国で，原則として，その国において制度上正規の学校教育に位置づけられたものであって，修了により大学への受験資格を得られることを要する。インターナショナルスクールやアメリカンスクール等の出身者については，本規定によって出願が認められないケースや出願資格の確認等に時間がかかる場合があるので，早めに照会すること。 イ 下記のいずれかの資格を外国において取得し，かつ，18歳に達したもの ○ スイス民法典に基づく財団法人である国際バカロレア事務局が授与する国際バカロレア資格 ○ ドイツ連邦共和国の各州において大学入学資格として認められているアビトゥア資格 ○ フランス共和国において大学入学資格として認められているバカロレア資格</p> <p>(2) 要件 次に掲げるすべての要件を満たすこと。 ア 独立行政法人日本学生支援機構が実施する日本留学試験（平成24(2012)年6月，11月実施のいずれか）の所定の科目をすべて受験すること（日本語・英語いずれの出題言語でも受験可）。所定の科目とは，文科各類を志望する者は文科系の科目である「日本語」・「総合科目」・「数学（コース1）」，理科各類を志望する者は理科系の科目である「日本語」・「理科（物理・化学・生物から2科目選択）」・「数学（コース2）」のことである。 （注）数学のコース選択を注意すること。コースの選択を間違えた者は，第1次選考不合格者とするので注意すること。 イ TOEFL（iBT，PBTのいずれでも可）又はIELTS（国際英語能力テスト。アカデミックモジュール）を出願前2年以内に受験すること。 ウ 外国の学校に，原則として，最終学年を含め継続して1年以上在学し，その最終学校を修了すること。</p> <p>[第2種] (日本人及び第1種以外の外国人) 平成23(2011)年4月1日から平成25(2013)年3月31日までの間に，次の基礎資格を取得し，かつ，要件を満たしている者とする。</p> <p>(1) 基礎資格 次のア，イいずれかに該当すること。 ア 外国において，我が国の学校教育12年に相当する課程の最終学校を修了した者及び修了見込みの者，又はこれに準ずる者で文部科学大臣の指定したもの 「外国において，我が国の学校教育12年に相当する課程の最終学校」とは，地理的，場所的に外国で，原則として，その国において制度上正規の学校教育に位置づけられたものであって，修了により大学への受験資格を得られることを要する。インターナショナルスクールやアメリカンスクール等の出身者については，本規定によって出願が認められないケースや出願資格の確認等に時間がかかる場合があるので，早めに照会すること。 なお，文部科学大臣が高等学校の課程と同等の課程を有するものとして認定した在外教育施設出身者は出願が認められない。 イ 下記のいずれかの資格を外国において取得し，かつ，18歳に達したもの ○ スイス民法典に基づく財団法人である国際バカロレア事務局が授与する国際バカロレア資格 ○ ドイツ連邦共和国の各州において大学入学資格として認められているアビトゥア資格 ○ フランス共和国において大学入学資格として認められているバカロレア資格</p>

出願資格	<p>(2) 要件 次のア、イいずれかの要件を満たすこと。 ア 外国の学校に最終学年を含め継続して3年以上在学し、その最終学校を修了すること。 ただし、最終学年の休業等によって書類上の在学期間が3年未満となる場合については、12月下旬に行う出願資格審査において、3年以上在学した者との実質的な同等性について判断する。 イ 外国の学校に最終学年を含め最終学年からさかのぼって連続する6年間のうち通算で5年以上在学し、その最終学校を修了すること。 ただし、休業等によって書類上の在学期間が5年未満となる場合については、12月下旬に行う出願資格審査において、5年以上在学した者との実質的な同等性について判断する。</p>
選抜方法等	<p>[第1種] (外国人であって日本国の永住許可を得ていない者) (1) 第1次選考 書類選考, 日本留学試験の成績及びTOEFL (又はIELTS) の成績 (2) 第2次選考 小論文, 面接 なお、小論文については次のとおりである。 [小論文] 2問を課す。 2問とも日本語で解答すること。</p> <p>[第2種] (日本人及び第1種以外の外国人) (1) 第1次選考 書類選考 (2) 第2次選考 小論文, 学力試験, 面接 なお、小論文及び学力試験の出題教科・科目については次のとおりである。 [小論文] 2問を課す。 第1問は日本語で解答し、第2問は次の言語のうちからあらかじめ出願の際に届け出たもので解答すること。英語、ドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語、スペイン語、イタリア語、韓国朝鮮語、アラビア語</p> <p>[学力試験] (文科各類) 外国語 英語 (英I, 英II, リーディング), ドイツ語, フランス語, 中国語から1外国語 ただし、問題の一部は、届け出た外国語に代えて、英語、ドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語、スペイン語、韓国朝鮮語のうちから一つを試験場において選択することができる。 (注) 英語試験の一部に聞き取り試験を行う。(30分程度)</p> <p>(理科各類) 数学 数I, 数II, 数III, 数A, 数B (「数列」, 「ベクトル」), 数C (「行列とその応用」, 「式と曲線」) 理科 物I・物II, 化I・化II, 生I・生II, 地学I・地学IIから2科目</p>
出願期間	<p>第1種 平成24(2012)年12月3日(月)から12月10日(月)まで 第2種 平成24(2012)年11月1日(木)から11月8日(木)まで</p>
選抜期日	<p>第1種 平成25(2013)年2月25日(月), 3月18日(月) 第2種 平成25(2013)年2月25日(月)・26日(火), 3月18日(月)</p>
合格者発表日	<p>平成25(2013)年3月22日(金)</p>
その他	<p>「平成25(2013)年度外国学校卒業学生募集要項」は、以下の方法で交付中である。 (1) Webサイトからダウンロード 「特別選考の概要」 http://www.u-tokyo.ac.jp/stu03/e01_02_04j.html (2) 「入学者募集要項等の入手方法」(裏表紙)</p> <p>外国学校卒業学生特別選考に関する照会先： 電話 03-5841-2366 電子メール nyuusi2@adm.u-tokyo.ac.jp</p>

團藤重光名誉教授

本学名誉教授團藤重光先生は、6月25日に逝去されました。享年98歳でした。



先生は、1935年に東京帝国大学法学部法律学科を卒業、同学部助手、助教授を経て、1947年33歳の若さで教授に昇任、1974年に停年退官されるまで、39年の長きにわたり本学において研究教育に従事され、刑事法学を中心に法律学の広い分野にわたって顕著な貢献をされました。

先生は、まず刑事訴訟法の研究に取り組み、精緻で完成度の高い理論体系を構築、それを基に、第二次大戦直後の戦後改革期には、刑事訴訟法の全面改正作業に指導的な役割を果たされました。それらを踏まえて1948年に公刊された刑事訴訟法の体系書は、当時のベストセラーとなり、その後も版を重ねて、長きにわたり研究者、法律実務家、学生等の手引きとされました。これと併行して、先生のご研究は刑法の分野に拡大され、やがて、「定型説」や「人格形成責任論」などを中核とする精緻でかつ確固とした独自の理論体系を樹立、それを基に著された体系書も、長く斯学の基本書とされました。ご研究の対象はこれにとどまらず、刑事政策、少年法、裁判法等広い分野に及び、さらには、それら一連のご研究、ご思索を通じて育まれたお考え（主体性の理論）を発展させて、法律学全体を視野に入れた学問体系の完成を一最晩年まで一目指されました。

先生は、本学在職中、後進の研究者を数多く育てられるとともに、日本刑法学会の創設に中心的役割を果たされ、その後はまた理事長として長年その運営に尽力されるなど、わが国刑事法学界全体の発展に大きく寄与されたばかりか、上記2つの体系書の英訳刊行をはじめとして、国際的な学術活動にも精力的に取り組まれ、そのご貢献は海外でも高く評価されています。

先生はまた、以上のような研究教育活動に加え、1963年から2年間、法学部長を務められ、学部の拡充改組計画を策定し、実現に導くなど、大学行政の面でも、手腕を発揮されました。学外の審議会等で歴任された要職は枚挙にいとまがありません。

東京大学停年退官後、先生は、慶應義塾大学で半年間教鞭を執られた後、最高裁判所判事に任じられ、9年余にわたりその職務に従事されましたが、その間、刑事事件のみならず、民事事件や行政事件などをも含め、いくつかの画期的な新判例をはじめとする判例の形成に参加するとともに、鋭くかつ示唆に富む少数意見を数多く著すことにより、直接・間接に法律実務の変化を促す役割を果たされました。1983年に最高裁判事を定年退官後、先生は、東宮職参与、宮内庁参与、学士会理事長等を務められるかたわら、死刑廃止論を公にし、幅広い読者を得るなど、学界・法曹界の枠を超えて、死刑をめぐる議論に大きな影響を与えられました。

以上のような卓越したご功績により、先生は、1981年日本学士院会員に、1986年文化功労者にそれぞれ選ばれ、1995年には文化勲章を受章されています。

先生の長年にわたるご貢献に深く感謝するとともに、常に慈父のように後進を教え導いて下さったお人柄を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

(大学院法学政治学研究科・法学部)

人事異動（教員）

発令日、部局、職、氏名（五十音）順

発令日	氏名	異動内容	旧（現）職等
（採用）			
24.7.16	中尾 博之	医学部准教授	神戸大学医学部附属病院特命准教授
24.8.1	小貫 元治	大学院新領域創成科学研究科准教授	大学院新領域創成科学研究科特任准教授
（昇任）			
24.8.1	鈴木 淳	大学院人文社会系研究科教授	大学院人文社会系研究科准教授
24.8.1	大黒 俊哉	大学院農学生命科学研究科教授	大学院農学生命科学研究科准教授
24.8.1	桑原 正貴	大学院農学生命科学研究科教授	大学院農学生命科学研究科准教授
24.8.1	宮下 直	大学院農学生命科学研究科教授	大学院農学生命科学研究科准教授
（配置換）			
24.8.1	浅見 泰司	大学院工学系研究科教授	空間情報科学研究センター教授

※退職後又は採用前の職等については、国の機関及び従前国の機関であった法人等のみ掲載した。

東京大学における教員の任期に関する規則に基づく専攻、講座、研究部門等の発令については、記載を省略した。

Contents

特集

- 02 世界の海洋生物学の研究拠点へ
ーマリン・フロンティア・サイエンス・プロジェクト開始ー

NEWS

- 06 第9回江崎玲於奈賞受賞
- 一般ニュース**
- 06 地球観測データ統合連携研究機構
「国連持続可能な開発会議(Rio+20)」にて展示・
パネルディスカッションを開催
- 07 本部学生支援課
第51回全国七大学総合体育大会開会式開催さ
れる
- 08 地球観測データ統合連携研究機構
第2回D I A S - G R E N E環境情報統合
フォーラムーグリーンイノベーションを支え
るデータ統合ーが開催される
- 09 本部環境安全課
「安全の日」講演会開催される
- 部局ニュース**
- 10 大学院総合文化研究科・教養学部
総合文化研究科職員の宮原洋子さんがモンゴル
国よりナイラムダル(友好)勲章を受章
- 10 海洋アライアンス
「防災海洋教育」シンポジウム等を浜松と豊橋で
開催
- 11 大学院法学政治学研究科・法学部
「法学部3号館竣工記念式典、施設見学会、祝賀
会」開催
- 12 情報基盤センター
学際大規模情報基盤共同利用・共同研究拠点 第
4回シンポジウム 開催報告
- 13 大学院農学生命科学研究科・農学部
中国食品発酵工業研究院と共同研究契約を締結

コラム

- 14 再生のアカデミズム<実践編> #06
- 15 ひょうたん島通信 第8回
- 16 決算のDOOR ~数字が語る東京大学 第23回
- 16 インタープリターズバイブル vol.61
- 17 Crossroad 産学連携本部だより vol.81
- 18 Policy + alt vol.35
- 19 ASIAN DIVERSITY No.22
- 19 Relay Column「ワタシのオシゴト」 第78回
- 20 救援・復興支援室より No.15
- 20 コミュニケーションセンターだより No.91

INFORMATION

募集

- 22 大学院人文社会系研究科・文学部
平成25(2013)年度 大学院人文社会系研究科入
学試験日程を発表

お知らせ

- 22 大学院総合文化研究科・教養学部
駒場博物館特別展「石の世界ー地球・人類・
科学ー」

- 23 本部情報基盤課
「医学・生命科学系論文の探し方」など「情報探
索ガイド」各種コース実施のお知らせ
- 24 史料編纂所
重要文化財『実隆公記』ほか所蔵史料を出陳
- 25 大学院工学系研究科・工学部
「第27回東京大学工学部・工学系研究科技術発
表会」開催のお知らせ
- 26 大学院理学系研究科・理学部
「第27回東京大学大学院理学系研究科・理学部
技術シンポジウム」開催のお知らせ
- 27 本部入試課
各種選抜要項・募集要項等の配布のお知らせ

訃報

- 33 團藤重光名誉教授

事務連絡

- 34 人事異動(教員)

淡青評論

- 36 ダイバーシティによるイノベーション研究推進:
コミュニケーション能力を育てる

編集後記

今月号の特集はいかがでしたでしょうか。三崎に臨海実験所があるということは以前から知っていましたが、この実験所がこんなにも歴史があり、バイオや医学に関わる研究が活発に行なわれているということは全く知りませんでした。読者のみなさんにも少しでも三崎に興味をもってもらえたらと思い、表紙写真は三崎に生息する生き物を取り上げてみました。左上のアカハコクモヒトデは、三崎臨海実験所周辺で採集される最も美しいモヒトデの一つだそうです。

ちなみに、三崎臨海実験所SBnetのウェブページから、「バーチャル自然観察会」「海産動物クイズ」という2種類のゲームが楽しめます(<http://www2.mmb.s.u-tokyo.ac.jp/hiroba/index.html>)。海産動物クイズは、難しくて散々な結果におわりましたが、バーチャル自然観察会は、画像をクリックして、様々な生き物を探ることができるので、とても楽しかったです。まだ夏らしいことを何一つしていないという方は、ぜひトライしてみてください！(ち)

◆表紙写真◆

三崎に生息している生き物たち。左上より時計回りに、アカハコクモヒトデ、アオウミウシ、ミナミハコフグ、モジジガイ。【2~5ページに
関連記事】(理学系研究科附属臨海実験所 相模湾生物ネットワーク提供)



七徳堂鬼瓦

ダイバーシティによるイノベーション研究推進： コミュニケーション能力を育てる

1986年に「男女雇用機会均等法」、1999年に「男女共同参画社会基本法」が制定され、女性が社会のあらゆる分野における活動に参画する機会の確保が法的に整備された。それから10年以上経た現在、単に女性だけでなく、若手、外国人、高齢者などを含めた多様な人材が能力を発揮できる社会を目指して様々な取り組みがされている。ダイバーシティ（多様性）の推進である。

2009年、2010年に、応用物理学会の人材育成・男女共同参画委員会の活動の一環として、イノベーション研究推進のための人材育成、グローバルに活躍する人材育成というテーマでシンポジウムを企画した。イノベーション研究やグローバルに活躍する人材育成には、ダイバーシティが必要という切り口だった。新しいアイデアから新たな価値を創造する、というイノベーション研究推進を考えると、多様化された環境でイノベーションが生まれやすいのだという論点である。東京大学においても、総長から出された行動シナリオでは、多様な教員構成の実現により研究教育活動を活性化するという目標の中で、女性教員、外国人教員比率を上げることが例にあげられている。単に数を増やせば、研究教育活動が活性化するのか、イノベーション研究が推進されるのか。私はお互いにコミュニケーションをとりあい、お互いに理解しあわないとイノベーションは生まれないと思っている。私の専門は医療デバイスに用いるバイオマテリアルであり、特に生体と材料の界面制御が研究テーマである。特性の異なる物質を複合させ新しい機能をもたせるというマテリアル設計がある。性質が水と油のように異なると混じり合わず不均一な相分離や界面剥離を引き起こすが、両者に親和性のある物質（界面活性剤）を混ぜて混合すると均質混合相となり両者の性質、さらには新しい物性も発現する。ダイバーシティからイノベーション研究推進を実現するには、男性/女性、日本人/外国人といった混じり合いにくい者を融合させる界面活性剤が必要で、これがコミュニケーションであると考え。コミュニケーション能力を育てる教育をしていきたいと思っている。

高井まどか（大学院工学系研究科・工学部）

（淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

〔訂正〕

学内広報において、一部誤りがありましたので訂正いたします。関係部署および関係者の皆様に深くお詫び申し上げます。

No.1427 (2012.7.25)

特集「アジア・アントレプレナーシップ・アワード2012」内

2ページ下段 Message 文末および3ページ上段本文末

(誤) P32

(正) P31 (Crossroad)

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報室の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報室までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、本部広報課を通じて行ってください。

No.1428 2012年8月27日
東京大学広報室

〒113-8654

東京都文京区本郷7丁目3番1号

東京大学本部広報課

TEL : 03-3811-3393

e-mail : kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

http://www.u-tokyo.ac.jp/